大分県文化財調査報告書第138輯

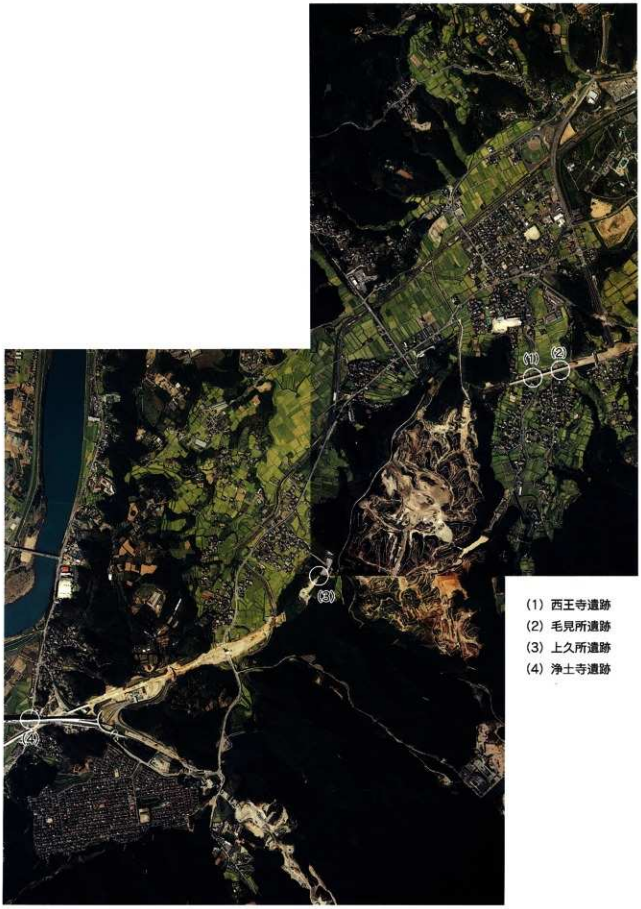
— 国道197号線東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

西王寺遺跡
毛見所遺跡
上久所遺跡
浄土寺遺跡

2002

大分県教育委員会

西王寺遺跡
毛見所遺跡
上久所遺跡
浄土寺遺跡



(1) 西王寺遺跡
(2) 毛見所遺跡
(3) 上久所遺跡
(4) 浄土寺遺跡

丹生台地周辺の空中写真

序　　文

大分市の東部、坂ノ市地区は『豊後国風土記』や『和名類聚抄』にいう「豊後国海部郡」の佐井郷・丹生郷にあたり、古代国家のもとで活躍した、いわゆる「海部の郷」の本拠地として知られています。

この一帯は、わが国初の「前期旧石器論争」の舞台となった丹生台地の遺跡群、海部郡衙推定遺跡である中安遺跡をはじめ、先史・原史時代から歴史時代を通して数多くの遺跡が点在しており、「豊後海部」の成立とその発展を探るうえでも注目されています。

本書は、国道197号線の東バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財調査として、平成７年度から９年度にわたって発掘調査した４箇所の遺跡の発掘調査報告書です。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後に、この調査に御協力を頂きました関係各位、地元の方々に対して厚く御礼申し上げます。

平成14年３月29日

大分県教育委員会教育長
石　川　公　一

例　　言

* 本書は、国道197号線の東バイパス建設事業に伴う西王寺遺跡、毛見所遺跡、上久所遺跡、浄土寺遺跡の発掘調査報告書である。
* 発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受け、平成７年度から９年度にかけて大分県教育委員会が実施した。
* 遺物の実測・トレースは、文化課職員、嘱託職員、整理補佐員が行った。
* 遺物の写真撮影は文化課主査の友岡信彦が行った。
* 出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
* 本書で使用した地図等は国土地理院作成のものを利用した。
* 本書の執筆は、西王寺遺跡・毛見所遺跡・浄土寺遺跡を大分県教育庁文化課主幹の栗田勝弘が行い、上久所遺跡は別府市立青山中学校教諭の藤内壽竹が行った。
* 本書の編集は西王寺遺跡・毛見所遺跡・浄土寺遺跡を栗田勝弘が、上久所遺跡は藤内壽竹が担当した。

Ⅰ．西王寺遺跡・毛見所遺跡

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 3
　調査経過 …… 3
　調査団の構成 …… 3
第２章　遺跡の立地と環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 6

１．西王寺遺跡 …… 6
　調査の概要 …… 6
　西王寺遺跡１号竪穴 …… 6
　出土遺物 …… 7
　西王寺遺跡２号竪穴 …… 8
　出土遺物 …… 9
　西王寺遺跡３号竪穴 …… 10
　出土遺物 …… 10
　西王寺遺跡４号竪穴 …… 12
　西王寺遺跡５号竪穴 …… 12
　出土遺物 …… 14
　集石遺構 …… 14
　Ｐ－22　出土の土器 …… 14
　Ｐ－57　出土の土器 …… 14
　Ｐ－70　出土の土器 …… 16
　Ｐ－117　出土の土器 …… 16
　Ｐ－119　出土の土鍾 …… 16

P－124　出土の土器 …… 16
P－134　出土の土器 …… 16
P－140　出土の土器 …… 16
その他一括の土器 …… 16

2．毛見所遺跡 …… 20
調査の概要 …… 20
A調査区 …… 21
土坑墓 …… 21
縄文土器 …… 21
弥生土器 …… 21
土師器 …… 21
B調査区 …… 31

3．小　　結 …… 31

図 版 目 次

第1図　遺跡位置図 …… 4
第2図　西王寺遺跡・毛見所遺跡の周辺主要遺跡分布図（1／25,000） …… 5
第3図　西王寺遺跡・毛見所遺跡調査区位置図（1／2,000） …… 6
第4図　西王寺遺跡遺構配置図（1／240） …… 7
第5図　西王寺遺跡1号竪穴実測図（1／40） …… 8
第6図　西王寺遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1／3） …… 8
第7図　西王寺遺跡2号竪穴実測図（1／40） …… 9
第8図　西王寺遺跡2号竪穴出土遺物実測図（1／3） …… 9
第9図　西王寺遺跡3号竪穴実測図（1／40） …… 10
第10図　西王寺遺跡3号竪穴出土遺物実測図（1／3） …… 11
第11図　西王寺遺跡4号竪穴実測図（1／40） …… 12
第12図　西王寺遺跡5号竪穴実測図（1／40） …… 13
第13図　西王寺遺跡5号竪穴出土遺物実測図（1／3） …… 14
第14図　西王寺遺跡集石遺構実測図（1／30） …… 14
第15図　西王寺遺跡P－22、P－57、P－70、P－117、P－119、P－124、P－134出土遺物実測図（1／3）） …… 15
第16図　西王寺遺跡P－134、P－140、その他一括出土遺物実測図（1／3） …… 17
第17図　西王寺遺跡出土遺物実測図（1／3） …… 18
第18図　西王寺遺跡出土遺物実測図（1／3） …… 19
第19図　毛見所遺跡調査区位置図（1／1,000） …… 20
第20図　毛見所遺跡土坑墓実測図（1／40） …… 21
第21図　毛見所遺跡A区出土縄文土器土器実測図（1／3） …… 22
第22図　毛見所遺跡A区出土弥生土器・石器実測図（1／3） …… 23
第23図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3） …… 24

第24図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）…… 25
第25図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）…… 26
第26図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）…… 27
第27図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）…… 28
第28図　毛見所遺跡A区出土須恵器実測図（1／3）…… 29
第29図　毛見所遺跡A区出土須恵器実測図（1／3）…… 30
第30図　毛見所遺跡B区礫層出土縄文土器実測図（1／3）…… 32
第31図　毛見所遺跡B区最下粘土層出土縄文土器実測図（1／3）…… 33
第32図　毛見所遺跡B区最下粘土層出土縄文土器実測図（1／3）…… 34
第33図　毛見所遺跡B区出土縄文土器実測図（1／3）…… 35
第34図　毛見所遺跡出土遺物実測図（1／3）…… 36

写真図版目次

発掘作業風景

写真図版1　西王寺遺跡・毛見所遺跡空中写真 …… 39
写真図版2　西王寺遺跡調査区近景（北方から）…… 39
写真図版3　西王寺遺跡1号竪穴（東方から）…… 40
写真図版4　西王寺遺跡2号竪穴（東方から）…… 40
写真図版5　西王寺遺跡3号竪穴（東方から）…… 40
写真図版6　西王寺遺跡4号竪穴（東方から）…… 41
写真図版7　西王寺遺跡5号竪穴（西方から）…… 41
写真図版8　西王寺遺跡作業風景（東方から）…… 41
写真図版9　西王寺遺跡集石遺構（西方から）…… 42
写真図版10　西王寺遺跡集石遺構断面（南方から）…… 42
写真図版11　西王寺遺跡出土遺物 …… 42
写真図版12　西王寺遺跡出土遺物 …… 43
写真図版13　西王寺遺跡出土遺物 …… 44

写真図版14　毛見所遺跡近景（西方から）…… 45
写真図版15　毛見所遺跡遺物出土状態 …… 45
写真図版16　毛見所遺跡遺物出土状態 …… 45
写真図版17　毛見所遺跡土坑墓出土状態（南方から）…… 46
写真図版18　毛見所遺跡最下粘土層発掘状態 …… 46
写真図版19　毛見所遺跡最下粘土層内縄文土器出土状態 …… 46
写真図版20　毛見所遺跡出土遺物 …… 47
写真図版21　毛見所遺跡出土遺物 …… 48

II. 上久所遺跡

本 文 目 次

第１章　はじめに …… 51
　調査経過 …… 51
　調査団の構成 …… 51
第２章　遺跡の立地と環境 …… 51
第３章　調査の成果 …… 53
　基本層序と遺構・遺物 …… 53
　掘立柱建物跡 …… 55
　出土遺物 …… 61
　小　結 …… 61

図 版 目 次

第１図　上久所遺跡周辺遺跡分布図（１／25,000） …… 52
第２図　上久所遺跡周辺地形図（１／1,000） …… 53
第３図　上久所遺跡遺構配置図（１／200） …… 54
第４図　上久所遺跡１号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 56
第５図　上久所遺跡２号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 56
第６図　上久所遺跡３号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 57
第７図　上久所遺跡４号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 57
第８図　上久所遺跡５号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 58
第９図　上久所遺跡６号掘立柱建物遺構実測図（１／80） …… 58
第10図　上久所遺跡出土遺物実測図（１／2） …… 59
第11図　上久所遺跡出土遺物実測図（１／2） …… 60

Ⅲ. 浄土寺遺跡

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 65
　　調査経過 …… 65
　　調査団の構成 …… 65
第2章　遺跡の立地と環境 …… 65
第3章　調査の成果 …… 68
　　小　結 …… 79

図 版 目 次

第1図　浄土寺遺跡周辺遺跡分布図（1／50,000） …… 66
第2図　浄土寺遺跡周辺地形図（1／2,000） …… 67
第3図　浄土寺遺跡調査区実測図（1／200） …… 69
第4図　浄土寺遺跡「金光明最勝王経石書」埋納土坑実測図（1／30） …… 69
第5図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 70
第6図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 71
第7図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 72
第8図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 73
第9図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 74
第10図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 75
第11図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 76
第12図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 77
第13図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 78
第14図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2） …… 79

写 真 図 版 目 次

写真図版1　浄土寺遺跡空中写真 …… 83
写真図版2　浄土寺遺跡調査区近景（西方から） …… 83
写真図版3　浄土寺遺跡「金光明最勝王経石書塔」移転後 …… 84
写真図版4　浄土遺跡「石書塔」の下の遺構検出状況 …… 84
写真図版5　浄土寺遺跡一字一石経埋納土坑（西方から） …… 85
写真図版6　浄土寺遺跡一字一石経埋納状態（西方から） …… 85
写真図版7　浄土寺遺跡一字一石経埋納土坑（北方から） …… 85
写真図版8　浄土寺遺跡出土礫石経（第5図） …… 86
写真図版9　浄土寺遺跡出土礫石経（第6図） …… 87
写真図版10　浄土寺遺跡出土礫石経（第7図） …… 88
写真図版11　浄土寺遺跡出土礫石経（第8図） …… 89
写真図版12　浄土寺遺跡出土礫石経（第9図） …… 90
写真図版13　浄土寺遺跡出土礫石経（第10図） …… 91
写真図版14　浄土寺遺跡出土礫石経（第11図） …… 92
写真図版15　浄土寺遺跡出土礫石経（第12図） …… 93
写真図版16　浄土寺遺跡出土礫石経（第13図） …… 94
写真図版17　浄土寺遺跡出土礫石経（第14図） …… 95

Ⅰ．西王寺遺跡・毛見所遺跡

第1章 はじめに

調査経過

大分県大分市大字佐野に所在する西王寺遺跡・毛見所遺跡の発掘調査は、国道197号線の東バイパス建設工事に伴う、事前の発掘調査として実施された。

西王寺遺跡は、丹生川の支流である佐野川の左岸にあり、小字は土井ノ内や西王寺と言われている。ここには、中世の頃、西王寺という寺が建立されていたが、大友氏と島津氏との戦いで焼失したという伝承がある。今回の調査対象面積は約2,000㎡である。調査期間は平成7年7月より9月にわたって実施された。

一方、佐野川の対岸に位置する毛見所遺跡は現在水田であり、今でも梅雨期には水の溜まるやや低い地形を形成している。

調査対象面積は約2,000㎡である。大部分が高架橋下に保存されるため、橋脚の部分を中心に調査を行った。調査期間は平成7年10月より12月にわたって実施された。

調査団の構成

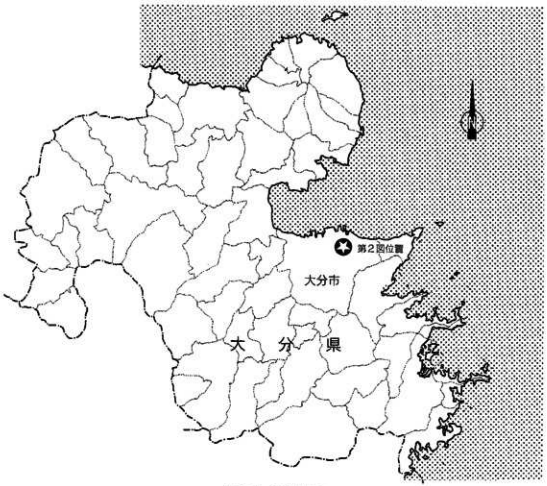
西王寺遺跡・毛見所遺跡の調査体制（平成7年度）は次のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会
調査指導　賀川　光夫（別府大学名誉教授）
　　佐々木　章（大分短期大学助教授）
調 査 員　末広　利人（大分県教育庁文化課課長）
　　渋谷　忠章（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第2係長）
　　栗田　勝弘（大分県教育庁文化課主査）発掘調査担当

発掘調査を実施するにあたり、佐野地区の人々を1日に約15人程度、発掘調査作業員として日々雇用した。

発掘作業風景

第2章　遺跡の立地と環境



第1図　遺跡位置図

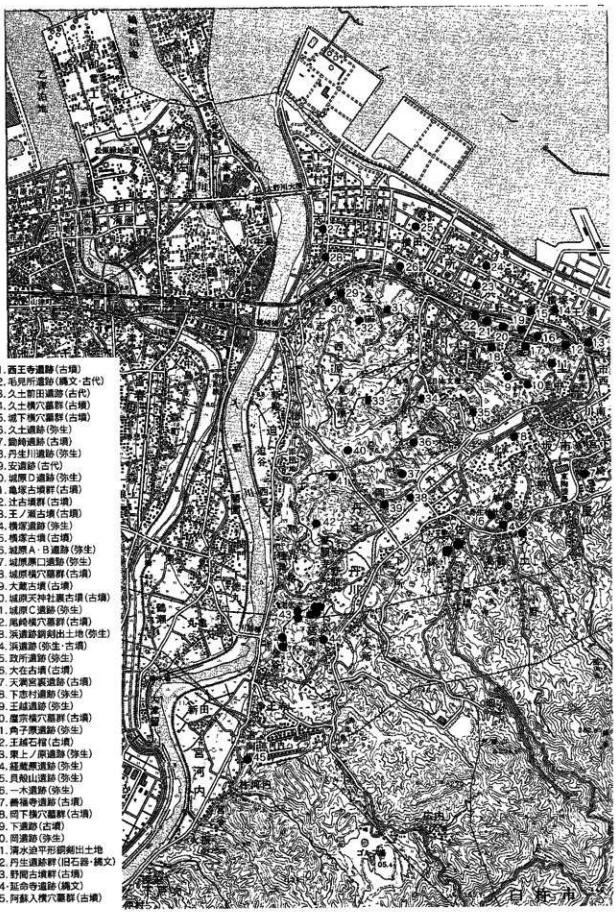
大分市の東部、大野川河口の右岸は海抜50mほどの丹生台地が展開している。かつて、わが国初の「前期旧石器論争」を巻き起こした丹生遺跡の所在地である。その東部に位置する九六位山（標高451.7m）に源泉をもつ丹生川が、椎ノ木山山系から流れ出す4つの支流を合して、狭い坂ノ市の沖積平野を形成している。

遺跡は坂ノ市の佐野地区、丹生川の支流である佐野川下流の左右岸の狭い沖積平野に位置している。つまり、左岸は古墳時代の竪穴住居跡を出土した西王寺遺跡、右岸は縄文晩期から弥生時代の土器、古代の須恵器、土師器を出土した毛見所遺跡である。

これらに関係する周辺の遺跡としては、昭和37年調査した大分大学学芸学部総合調査報告『丹生川』遺跡がある。弥生時代の水田址の矢板列や木器類が多数出土し注目された遺跡である。

古墳時代では丹生台地の南端に位置する野間古墳群がある。昭和40年の鶴崎臨海工業地帯に起因する新産都区域内緊急発掘調査で、前方後円墳を含む10基の古墳群が発掘調査されている。また一方、東方には上ノ坊前方後円墳、北方には県下最大規模を誇る亀塚前方後円墳をはじめ、古墳時代後半期の岡下横穴墓群等がある。

古代の遺跡としては、亀塚前方後円墳から繋がる同じ台地の中央には中安遺跡がある。掘立柱建物群が企画性を保って整然と配置されており、海部郡衙に推定される広大な遺跡である。また、西王寺・毛見所遺跡に隣接するものとしては、丹生川の支流、久土川流域の久土遺跡がある。



第2図　西王寺遺跡・毛見所遺跡の周辺主要遺跡分布図（1／50,000）

第3章　調査の成果

1．西王寺遺跡

調査の概要

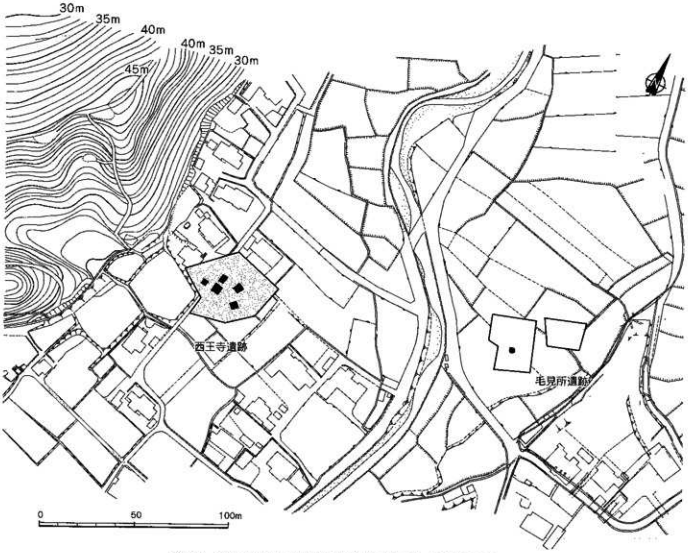
西王寺遺跡の発掘調査の結果、西王寺に関する遺構、遺物などは確認されてはいないが、表土下約20～40cmで、時期不明の溝状遺構や、古墳時代のカマドを持つ竪穴住居跡を含む5基の竪穴と多数の柱穴群、時期不明の集石遺構1基が検出された。

西王寺遺跡1号竪穴（第5図）

調査区中央に位置するほぼ方形の竪穴である。竪穴規模は長軸4.2m、短軸4.1mであり、竪穴の深さは5cm程度である。竪穴中央と竪穴内には複数の柱穴が遺存しているが、竪穴プランに添うものは判然としない。

竪穴には、焼土やカマド施設等はなく、遺物も僅少でこの竪穴に伴う遺物かどうかも、はっきりとは判らない。

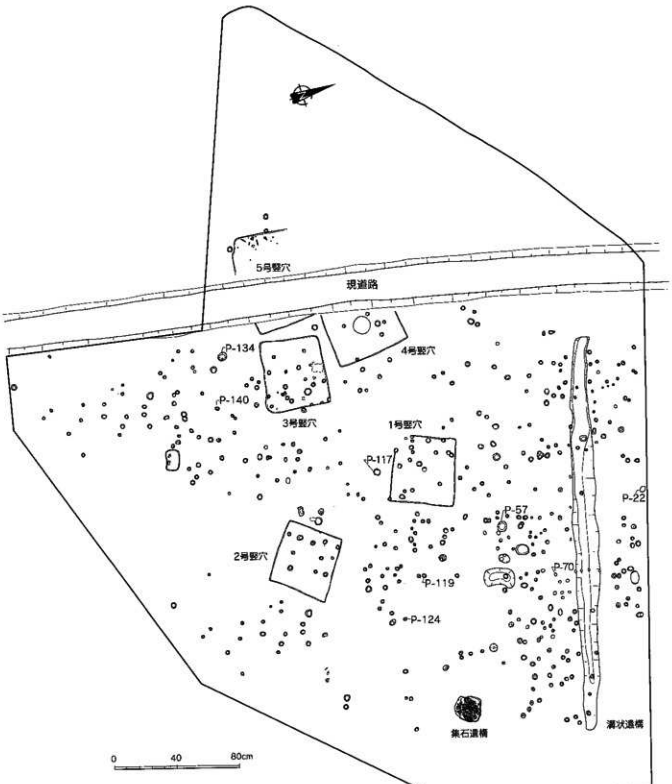
竪穴短軸は、N22°Eの傾きを呈する。竪穴の南西隅部は一部削平されている。竪穴の時期は不明である。



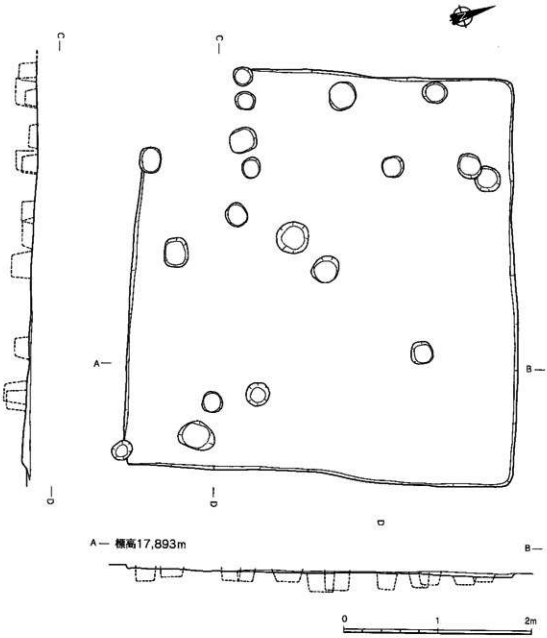
第3図　西王寺遺跡・毛見所遺跡調査区位置図（1／2,000）

出土遺物（第６図）

竪穴出土の遺物は僅少であり、土器片が少数出土したのみである。１は瓦器質の土器口縁部である。口径14.4cmである。２は土師器の椀か坏の口縁部である。口縁部はやや尖り気味に細めに仕上げている。時期は不明である。



第４図　西王寺遺跡遺構配置図（1／240）



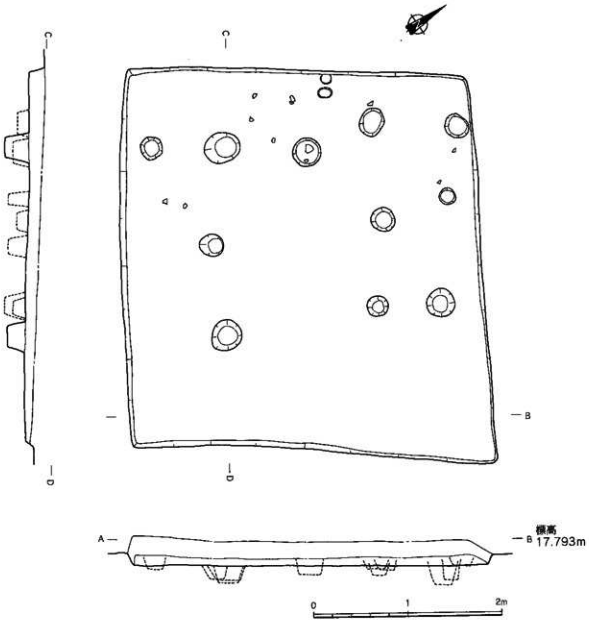
第５図　西王寺遺跡１号竪穴実測図（1／40）

第６図　西王寺遺跡１号竪穴出土遺物実測図（1／3）

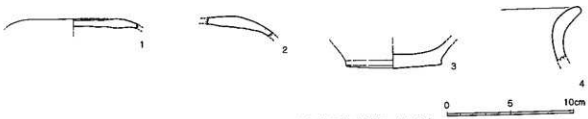
西王寺遺跡２号竪穴（第７図）

調査区中央のやや南よりに位置する方形の竪穴である。竪穴規模は長・短軸とも4.0mであり、竪穴の深さは15～18cm程度である。竪穴内には複数の柱穴が遺存しているが、３本並ぶ柱穴が、これに伴うものであろうか。竪穴プランに添うものは判然としない。

竪穴短軸は、N38°Eの傾きを呈する。竪穴の時代は不明である。



第7図　西王寺遺跡2号竪穴実測図（1／40）



第8図　西王寺遺跡2号竪穴出土遺物実測図（1／3）

出土遺物（第8図）

竪穴出土の遺物は僅少であり、須恵器片と土師器片が少数出土したのみである。1、2は須恵器の坏蓋部の天井部や肩部である。3は土師器の椀か坏の底部である。4の口縁部はやや外反し、口唇は丸く仕上げている。

西王寺遺跡３号竪穴（第９図）

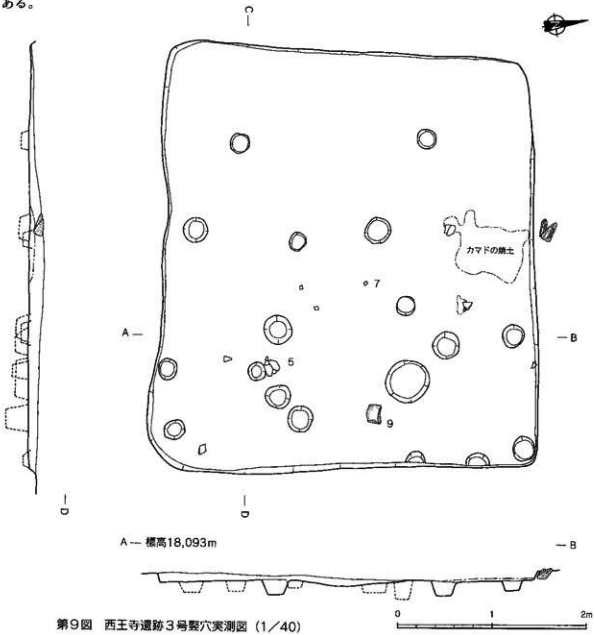
調査区中央の西端部に位置する長方形の竪穴である。竪穴規模は長軸4.40m、短軸4.0mであり、竪穴の深さは10cm程度である。竪穴内には複数の柱穴が遺存しているが、４本主柱が、これに伴うものであろうか。竪穴の床面から柱穴の底部までは数cm～十数cmと浅いものである。

竪穴の北側壁面中央には、カマドの破損した焼土の広がりがある。焼土の塊の付近には、カマドの施設の一部と推察される、端が丸く、やや長めの、焼けた自然礫が２つ遺存していた。

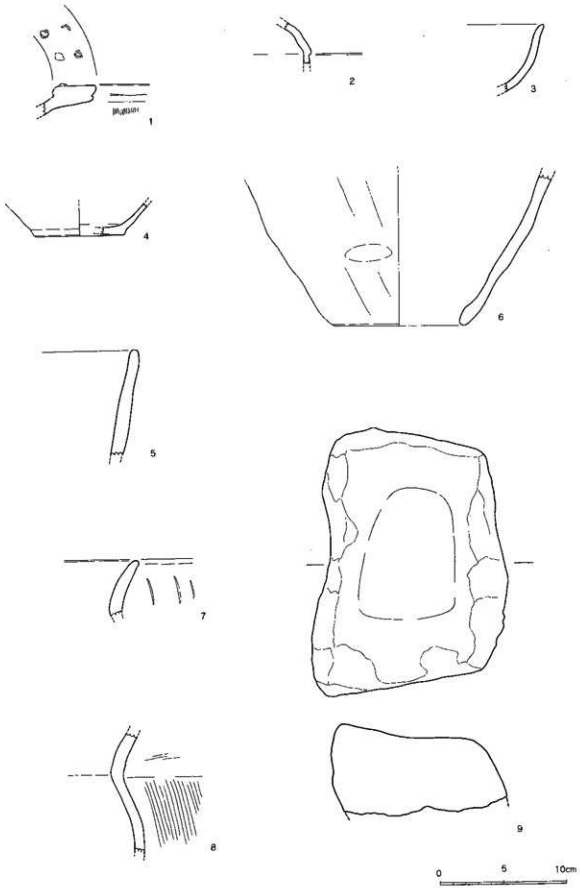
竪穴短軸は、Ｎ14°Ｅの傾きを呈する。竪穴の時代は古墳時代である。

出土遺物（第10図）

竪穴出土の遺物は僅少であり、弥生土器、須恵器、土師器、粗製の甕、甑の破片、砥石等が少数出土したのみである。１は鑓先状を呈し、浮文を持つ弥生土器の口縁部である。２は須恵器の坏蓋の肩部である。３は口縁部が心持ち開く土師器の椀である。４は坏の底部で、底径7.2cmを測る。５の口縁部はやや外斜し、口唇は丸く仕上げている。甑の口縁部であろう。６は甑の低部である。底径10.2cmを測る。成形は撫で調整しているが器壁は凹凸が顕著である。７、８は粗製甕の口縁部と頸部である。内外は煤が付着している。８の外面は刷毛目調整である。９は砥石の破片である。縦長21cm、横長15cmである。



第９図　西王寺遺跡３号竪穴実測図（1／40）



第10図　西王寺遺跡３号竪穴出土遺物実測図（1／3）

西王寺遺跡４号竪穴（第11図）

調査区中央の西端部に位置する長方形の竪穴である。竪穴規模は西半分が現道の下に大きくかかり、全体的な規模は判らないが、一辺は4.7mであり、竪穴の深さは数cm～10cm程度である。竪穴内には複数の柱穴が遺存しているが、これに伴うものは判然としない。竪穴の床面から柱穴の底部までは数cm～十数cmと浅いものである。

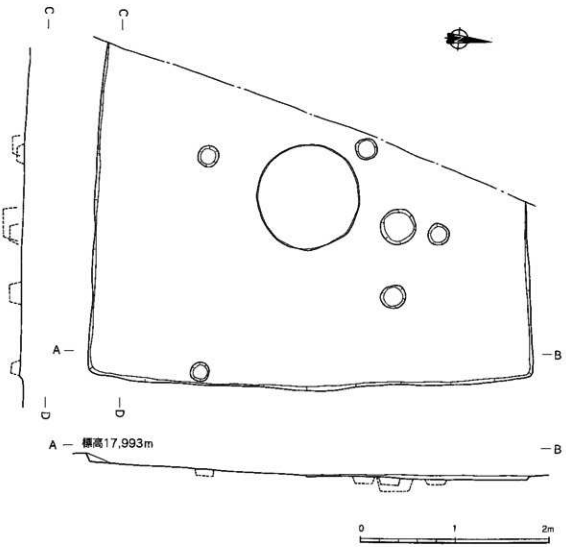
竪穴の中央には、円形の土坑があるが、時代の新しいものである。その他の、竪穴の付属施設は認められない。

竪穴短軸は、Ｎ５°Ｗの傾きを呈する。竪穴の時代は不明である。

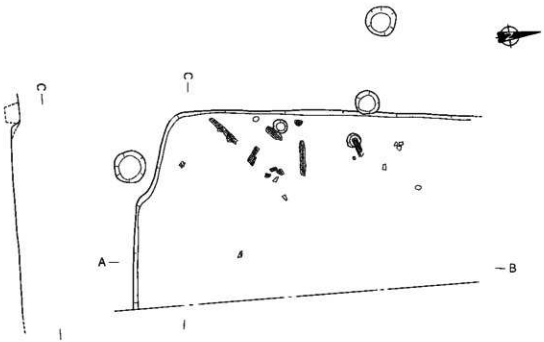
西王寺遺跡５号竪穴（第12図）

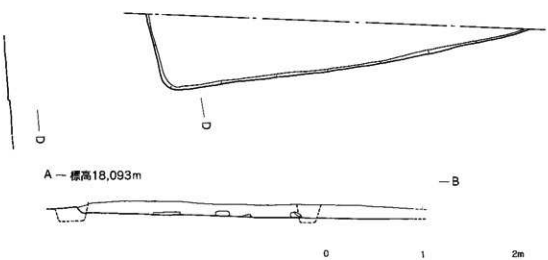
調査区中央の西端部に位置する長方形の竪穴である。竪穴規模は、中央部の大半が現道の下にかかり、全体的な規模は判らないが、東側の一辺が検出されており、西・東軸を復元すると約６mとなる。竪穴の深さは数cm～10cm程度である。竪穴内の柱穴は判然としない。竪穴の西端の床面には垂木と思われる炭化材が複数認められる。

竪穴短軸は、Ｎ９°Ｅの傾きを呈する。竪穴の時代は古墳時代である。



第11図　西王寺遺跡４号竪穴実測図（1／40）

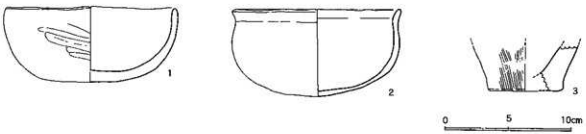




第12図　西王寺遺跡５号竪穴実測図（1／40）

出土遺物（第13図）

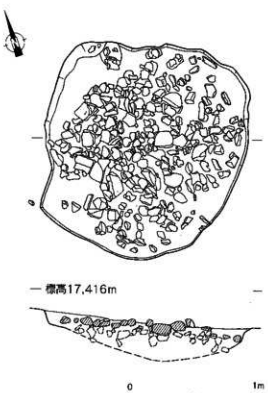
竪穴西端の床面で、２個の完形の古墳時代土師器碗が検出されている。１は口径13.5cmで器高6.1cmの丸底の碗である。器の表裏は撫で調整であり、部分的に刷毛撫で痕跡を残している。色調は明赤褐色である。２の口縁部は心持ち外反し、口径13.2cmで器高6.9cmの丸底の碗である。器の表裏は撫で調整であり、口縁付近は横撫でである。底部外面は削り痕跡を残している。色調は明赤褐色である。３は弥生時代の甕の平底底部である。表面に縦方向の 刷毛目痕を残し、底径5.8cmである。



第13図　西王寺遺跡５号竪穴出土遺物実測図（1／3）

集石遺構（第14図）

調査区の東端で時期不明の集石遺構が１基検出されている。集石遺構は直径約160cmの円形に集められたもので、石は拳から掌大の大きさの角礫状を呈し、赤褐色に焼けた状態であった。遺構断面は皿状に掘り込まれたもので、深いところで約25～30cmの深さを呈している。



第14図　西王寺遺跡集石遺構実測図（1／30）

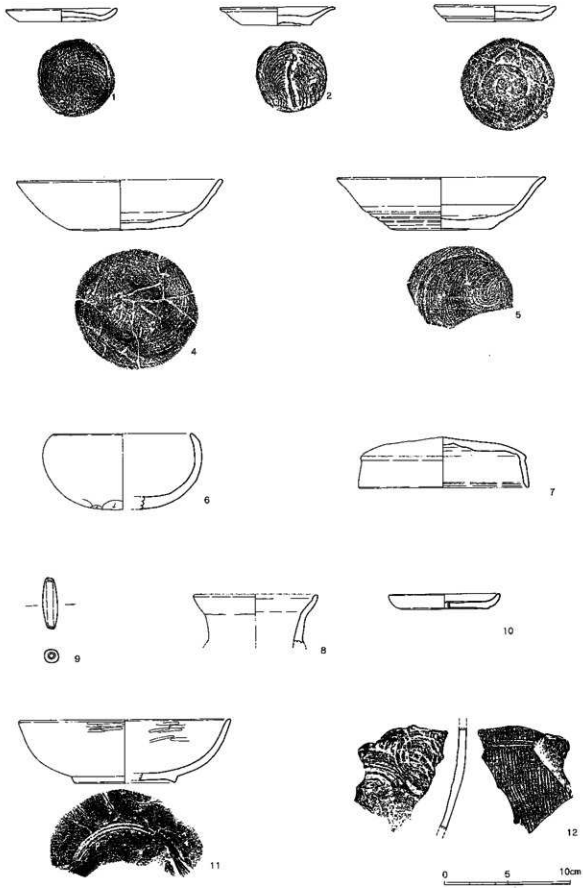
P—22　出土の土器（第15図1～5）

１～３は土師器の小皿、4、5は土師器の坏である。P－22の遺構出上の一括資料である。1、2の底部は回転糸切りであり、上げ底気味である。1は口径8.7cm、底径6.6cm、器高1.1cm。２は口径９cm、底径5.6cm、器高1.5cm。3の底部は回転ヘラ切りであり、上げ底気味である。3は口径9.6cm、底径7.4cm、器高1.3cm。

4、５の土師器の坏はロクロ成形であり、底部は回転糸切りである。４は口径16.3cm、底径9.3cm、器高3.9cm。２は口径16.5cm、底径8.4cm、器高4.1cm。

P—57　出土の土器（第15図6）

６は口縁部内湾する土師器の碗である。表裏は撫で調整し、底部の器壁は厚めである。口径11.1cm、　底径６cm、器高６cm。



第15図　西王寺遺跡P－22(1～5)、P－57(6)、P－70(7)、P－117(8)、
P－119(9)、P－124(10)、P－134(11、12) 出土遺物実測図(1／3)

P—70　出土の土器（第15図７）

７は須恵器の蓋である。天井部は回転ヘラ切り痕跡を留めるが撫で調整が顕著である。口縁部の内面は心持ち段が残っている。口径13.2㎝、天井部径13.5㎝、器高４㎝。

P—117　出土の土器（第15図８）

８は土師器の小型壺の口縁部であろう。口径9.9㎝を測る。

P—119　出土の土錘（第15図９）

９は土錘である。長さ4㎝、幅1.2㎝、重さ4.9ｇ。

P—124　出土の土器（第15図10）

10は土師器の小皿である。10は口径8.6㎝、底径７㎝、器高1.2㎝。

P—134　出土の土器（第15図11、12）、（第16図１）

11は高台付椀である。低い高台を持ち、表裏の器壁にヘラ磨きの痕跡を残しているが、全面撫で調整されている。口径16.6㎝、底径8.2㎝、器高5㎝を測る。12は須恵器の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキの青海波文がある。第16図１も須恵器の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキの青海波文がある。

P—140　出土の土器（第16図2）

２の土師器は回転糸切り底で、底径7.8㎝を測る。

その他一括の土器（第16図３～15）、（第17図１～13）、（第18図１～９）

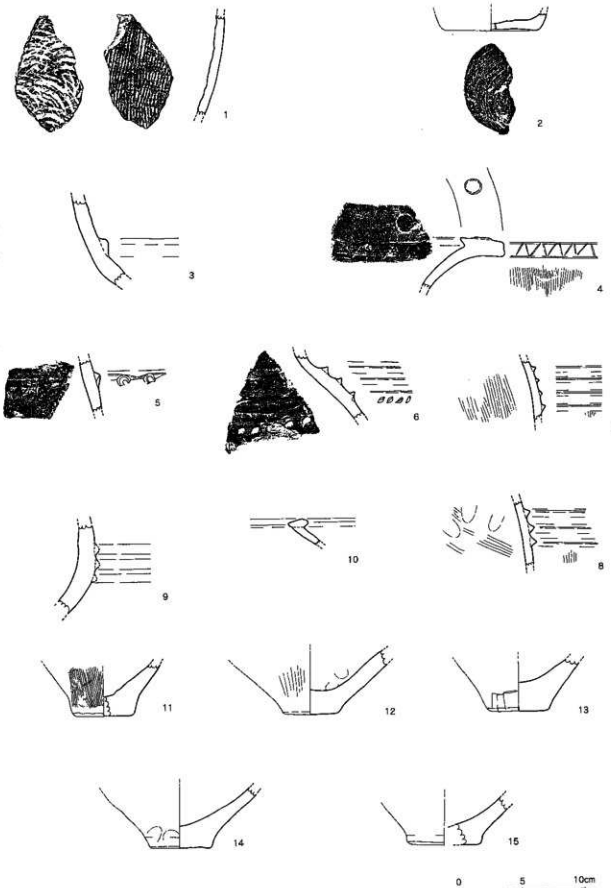
第16図３～９は弥生時代の壺形土器である。３は壺の頸部に施文された断面三角形の突帯文である。４は鋤先状の口縁部である。平坦な口縁部には円形浮文が施文され、外縁には鋸歯状文を連続施文している。５は突帯下に勾玉状の貼付け文。６～９は断面三角形の貼付け突帯文が３～４条施文されている。６の突帯下には刺突文が施文されている。10は壺の内傾する口縁部である。11～15は平底部である。11は底径５㎝、12は底径4.4㎝、13は底径4.8㎝、14は底径５㎝、15は底径5.8㎝。

第17図１～３は古墳時代の須恵器である。１は坏である。口縁部の立ち上りは高く、口唇は鋭利な仕上げである。口径11.4㎝。2は赤褐色を呈する赤焼き須恵器の甕である。口縁部は外反し、口唇に細い沈線を巡らす。胴部上半に最大径がくる。表面は縦の平行タタキに横走するカキ目を施文、内面は同心円タタキとヘラ削り痕跡を残す特徴的なものである。口径21.4㎝で胴部最大径は27.6㎝を測る。

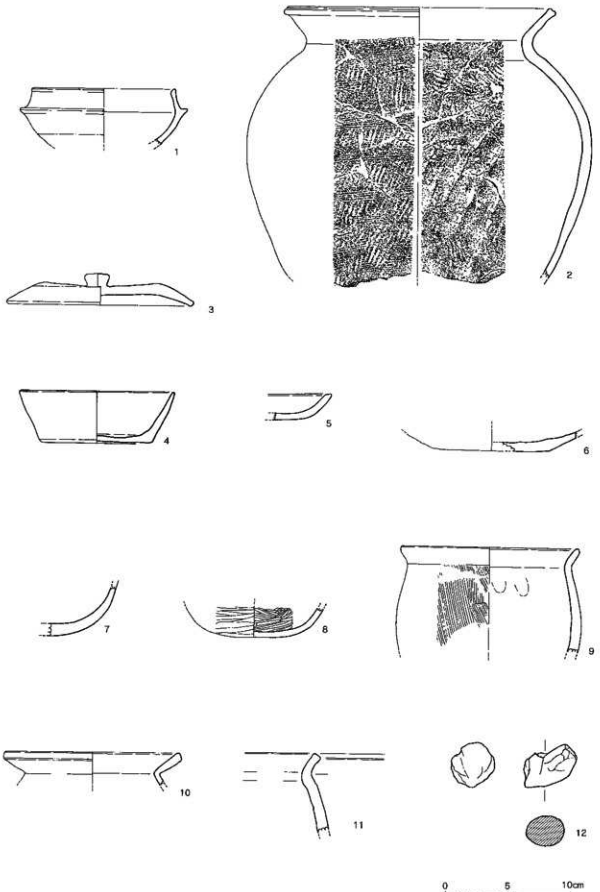
３は宝珠撮みを持つ古代の坏蓋である。口径14.8㎝で器高2.5㎝を測る。

４～12は古代の土師器である。４は回転ヘラ切り底の坏である。口径12.6㎝、底径8.7㎝、器高4.2㎝を測る。５～８は体部と底部との境は明瞭ではない。６は底径9.3㎝を測る。８は丸底の椀である。表裏にはヘラ磨きが顕著である。

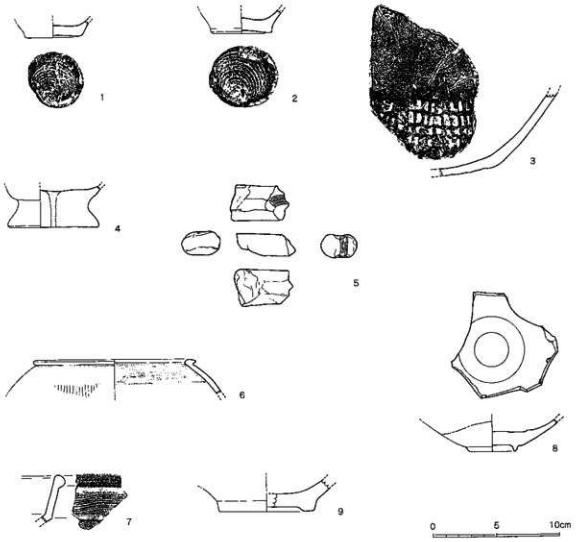
10～12は古代の甕形土器である。10の表面は縦ハケ目文、内面は指押さえに撫ぜ調整。口径14.1㎝を測る。11は口径13.3㎝を測る。12は古代の甕形土器のトッテである。



第16図　西王寺遺跡P－134(1)、P－140(2)、その他一括（3～15）出土遺物実測図（1／3）



第17図　西王寺遺跡出土遺物実測図（1／3）



第18図　西王寺遺跡出土遺物実測図（1／3）

第18図１、２は回転糸切り底の小皿である。１、２の底径4.8cmを測る。３は瓦質の土鍋の底部である。底部付近にタタキを残している。４は燭台である。底径7.5cmで、厚さ３cmの中心に穿孔が開いている。５は棒状の粘土塊に穿孔がある。器種は不明である。６～８は陶器。６は口径13.2cm、８は底径4.2cmを測る。９は磁器の底部である。底径7.8cmを測る。

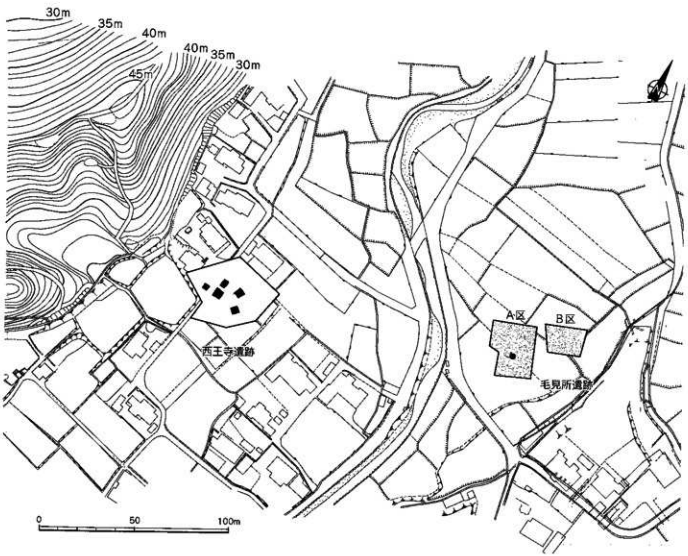
2．毛見所遺跡

調査の概要

発掘調査の結果、表土層下約20～30cmの堆積土の中に幾つかの水田面を確認できるが、それより下層は灰褐色の粘土が厚く堆積しており、顕微鏡によるプラントオパールの簡易観察でも水田面であった可能性は薄いという。この粘土の堆積は約60～180cmもあるが、層中に薄い砂層が数枚挟まっており、河川の氾濫と堆積が繰り返された様相が認められた。

発掘調査は橋脚の間をA調査区、橋脚部分をB調査区と仮称した。A調査区の遺構としては土坑墓1基、遺物としては厚い粘土の堆積土中に奈良時代末～平安時代の須恵器や土師器の破片がまとまって出土している。あまり良い条件とは言えない場所であるが、古代にはいくらか生活していた様子がうかがえる。

また、B調査区最下層の粘土層から、ローリングを受けた縄文晩期の刻目突帯文土器等が少量出土している。なお、A調査区出土の刻目突帯文土器の内面には籾粒の圧痕が1粒付着していた。

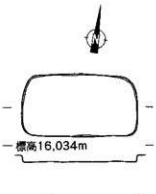


第19図　毛見所遺跡位置図（1／1,000）

A調査区

土坑墓（第20図）

土坑墓はA調査区の中央部で検出されている。平面プランは隅丸の長方形を呈し、長軸120cm、短軸60cmで検出面からの深さは約10cmである。土坑墓の時期は不明であるが、その形態や出土状態から中世の屋敷墓に相当するものであろう。



第20図　毛見所遺跡土坑墓実測図
(1／40)

縄文土器（第21図1～15）

1、2は深鉢形土器の同一個体である。1は外斜口縁部であり、口唇は撫で調整され、口縁下部に低い刻み目突帯文が一条施されている。表面は斜め条痕、内面は横条痕を撫で調整をしている。内面部にはふっくらした籾粒の圧痕が遺存していた。3～7は条痕文を施す胴部土器片である。8～10は表面に粗い沈線文を施した口縁部付近の破片である。11の口縁部は「く」の字を呈して浅く折れ曲がる浅鉢形土器である。12、13は黒色磨研土器である。大きく外反する口縁部であり、胴部で強く折れ曲がる浅鉢形土器である。胴部屈折部の表面には一条の沈線文が巡っている14、15は屈折する胴部片である。

弥生土器（第22図1～8）

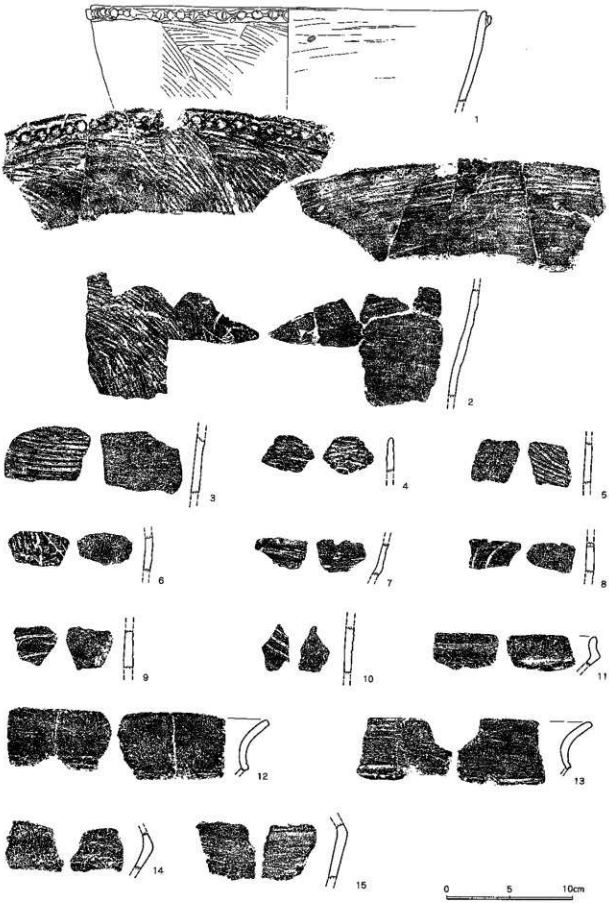
1は鋤先状を呈する肥厚した壺の口縁部である。平坦部に円形浮文を施し、口唇外縁には「ハ」の字のヘラ描き文が特徴である。2は頸部の破片である。低い三角突帯と勾玉状の貼付け文が施文されている。3、4は断面三角突帯文を複数施す壺の頸部である。5は壺の胴部の破片であろう。6、7は甕の口縁部である。6は一条の刻み目突帯を施文する。8は甕の底部である。下城式土器の甕の一群であろう。

土師器（第23図1～13）

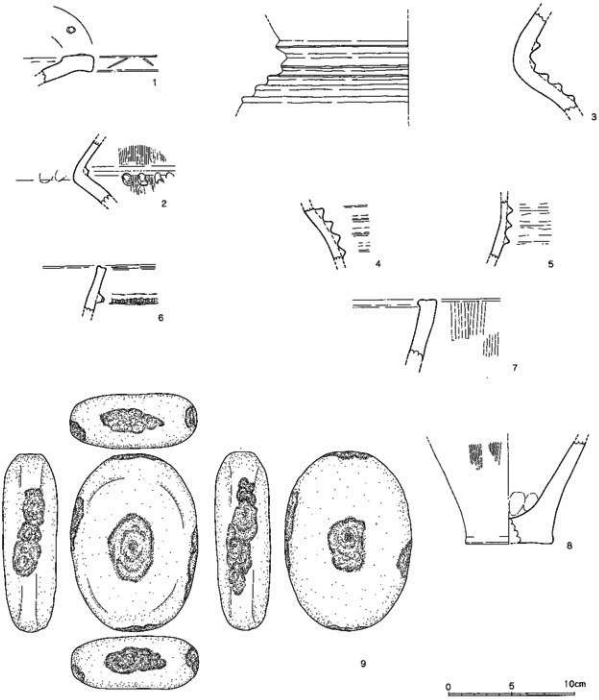
1、2は土師器の坏である。坏の口縁部は心持ち外反している。1は口径11.7cm、器高3.9cm、底径7.5cmを呈する。2は口径12cm。3、4は土師器の坏である。口縁部は心持ち外反気味で、口唇部は外向きに尖っている特徴的なものである。3は口径14.6cm、4は口径17cmである。5、6は外斜口縁を呈し、底部と胴部の境目が不明瞭な坏である。5は口径11.2cm、器高3.7cm、6は口径13.6cm、器高4cm、底径8.8cmを呈する。7～11は口径に比べ器高が低い一群である。7、8は底部と胴部の境目がない丸平底のものである。7は口径14cm、器高3cm、8は口径18.4cm、器高3.6cmを呈する。10、11は口唇のやや尖り気味な盤である。10は口径17.2cm、器高2.7cm、底径13.5cmを呈する。11は口径20.5cm、器高3.5cm、底径17.2cmを呈する。12は口径20cmを呈し、片口状の注ぎ口を持つ。13は回転ヘラ切りの底部である。

土師器（第24図1～19）

1～6は表裏に撫で調整の後に、ヘラ磨きを施文する一群である。3～5の口唇は外向きに尖り気味である。表面に横、斜めのヘラ磨きを呈し、内面には中心に向かう縦状の暗文状の磨きが施されている。3は口径15cm、4は口径16cm、5は口径17cmを呈する。6の底径は8cmである。7は緩い外反口縁を呈し、口径13cm、器高1.8cm、底径10cmを測る。9は7と形態や大きさが同じであるが、8、9は土師器の蓋であろうか。10は土師器の蓋の宝珠状摘み部である。11から14は口縁部やや肥厚し、屈折部から内湾気味に外斜する特徴的な甕形土器である。12の表裏には斜めの刷毛目痕跡を残している。14は口径18.8cmを呈する。15～19は緩く外反する甕の口縁部である。19は口径13cmを呈する。



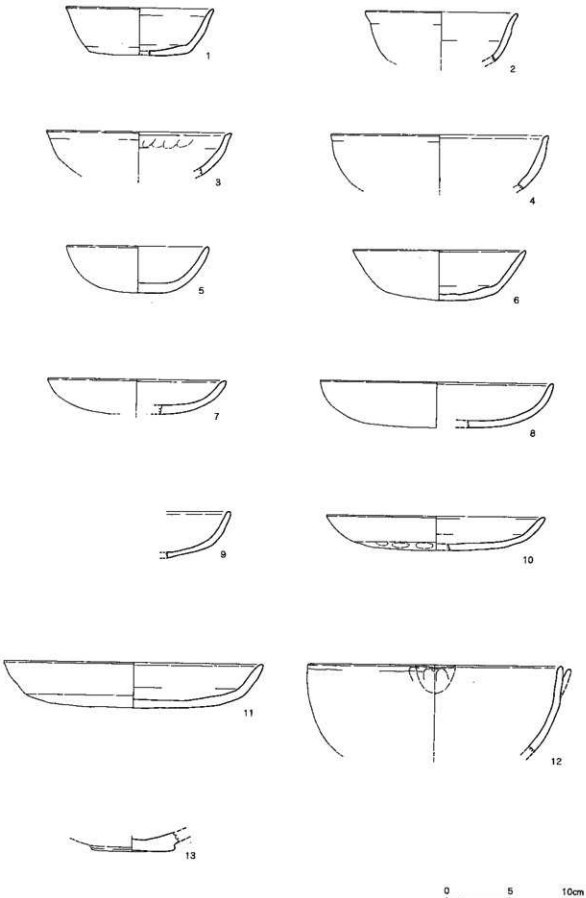
第21図　毛見所遺跡A区出土縄文土器実測図（1／3）



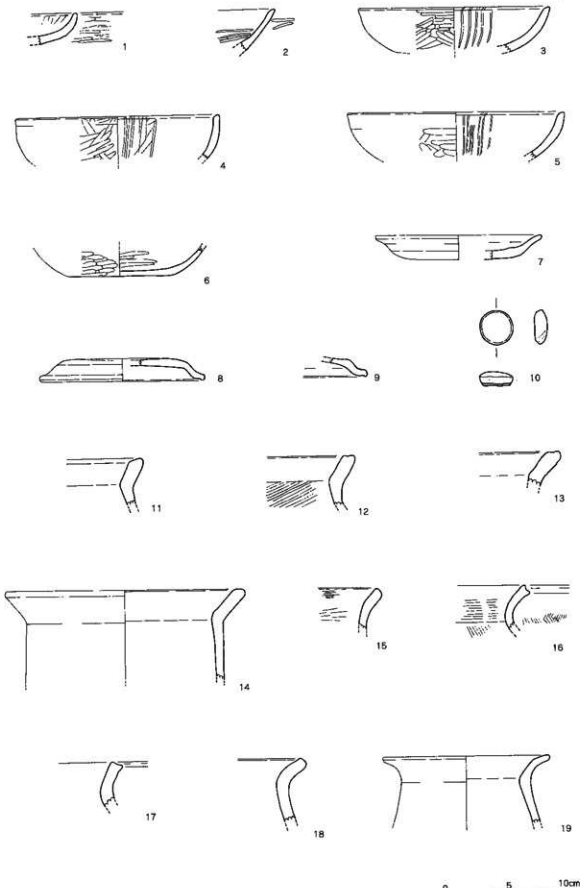
第22図　毛見所遺跡A区出土弥生土器・石器実測図（1／3）

土師器（第25図1～12）

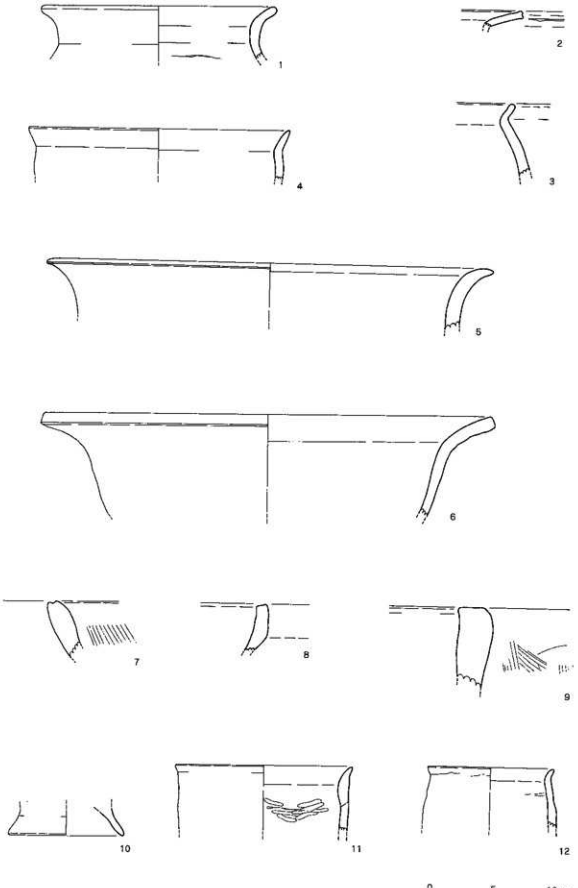
1～4は外反する口縁部である。1は大きく外反し、3は短く外に折れ、4は心持ち外斜口縁となる。1は口径18.4cm、4は口径20.4cm。5は短く外反して尖り気味な地縁部を持つ甕形土器である。口径35.4cmを測る。6は口径36cmの分厚い外反口縁の甕形土器である。7～9は器壁の厚い土器で刷毛目痕跡をのこしている。8の口縁部は帯状に肥厚している。10は底径9.1cmの脚部である。11、12は口縁部心持ち内傾しながら外反し、口唇は尖り気味である。11の内面は撫での後、磨きが施されている。11は口径14cm、12は口径10cmである。



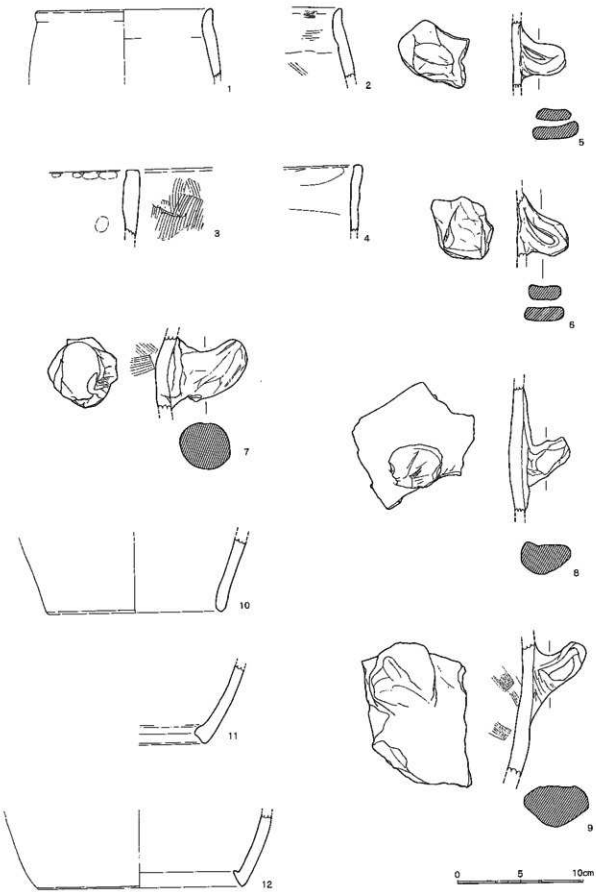
第23図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）



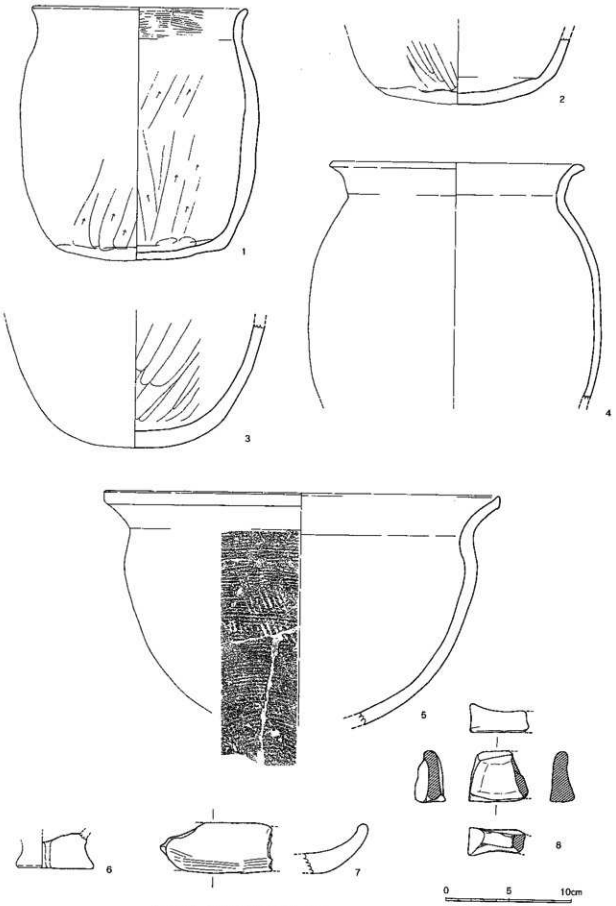
第24図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）



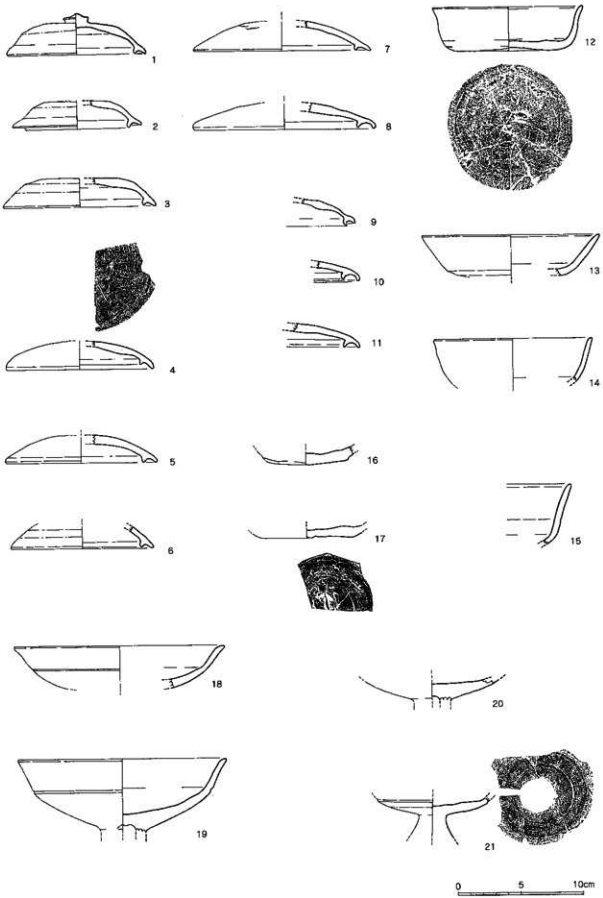
第25図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）



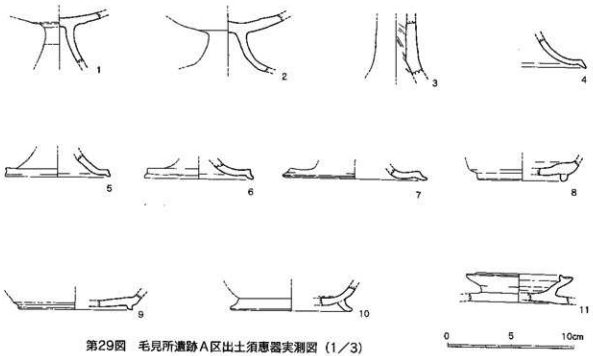
第26図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）



第27図　毛見所遺跡A区出土土師器実測図（1／3）



第28図　毛見所遺跡A区出土須恵器実測図（1／3）



第29図　毛見所遺跡A区出土須恵器実測図（1／3）

土師器（第26図1～12）

1、2の口縁部は心持ち内傾しながら外反し、口唇は尖り気味である。3、4は直行口縁であり、甑の口縁部と推察される。5～9は甑のトッテ部である。5、6は扁平な粘土紐を上部へ折り曲げて中空のトッテを形成し、7～9は粘土紐を天狗の鼻状に張り付けている。10～12は甑の底部である。11、12は端部を内側に肥厚させ段を形成している。

土師器（第27図1～8）

1は口径17cm、胴部最大径18.9cm、底径12.8cm、器高20cmを呈するほぼ完形の甕形土器である。全体的に撫ぜ調整されており、内外面はヘラ削りが残っていた。特に底部付近は顕著である。2、3の底部も同様な形態の甕形土器のものである。4は外反口縁を呈する甕形土器である。口径20cm、胴部最大径23.4cmで、表裏撫ぜ調整されている。5は口径31.4cm、胴部最大径27.9cm、器高19.5cmを呈するほぼ完形の鉢形土器である。口唇部を尖らせて縁どりを明瞭に仕上げている。胴部にタタキ目痕跡を残し、底部近くは回転のカキ目が認められる。6は蓋台である。底径は6cmで、中央部に穿孔がある。7、8は粘土の焼き物であるが、土器の部分とは考えにくく、移動式のカマドの部分かもしれない。

須恵器（第28図1～21）

1～11は宝珠撮みの付く須恵器の坏蓋の破片である。体部から天井部の境目が比較的明瞭な1～3と、そのまま丸く立ちあがる4～8に二分できる。1は口径11cm、器高は天井部までは2.4cmで、宝珠撮みの頂部までは3.3cmである。2は口径10.2cm、天井部まで2.1cm。3は口径12cm、天井部まで2.3cm。4は口径11.7cm、天井部まで2.1cm。5は口径12cm、天井部まで2.4cm。5は口径12cm、天井部まで2.4cm。6は口径11.4cm、天井部まで2.4cm。7は口径14cm、天井部まで2.4cm。8は口径14.4cm、天井部まで2.1cmである。

12～17は須恵器の坏である。12は口縁部心持ち外反し、蓋のような形態をしている。底部にはヘラ記号が刻まれている。口径11.8cm、底径9cm、器3.4cm を測る。13は口径14cm、底径8.7cm、器高3cm を測る。14は口径12.4cm、17はヘラ記号が刻まれている低部である。底径7.2cm を測る。

18～21の口縁部は緩く外反した高坏の坏部である。体部に一条の界線が巡る。18は口径16.6cm、19は口径16.4cmを測る。21の高坏の坏部には、中心に向いた9個の矢印状の記号が円形に施文されている。

須恵器（第29図1～12）

1～7は高坏の脚部である。3の脚部は器壁が厚く他に比べてやや大型である。4～7の脚端の断面は「鳥の嘴」状に屈折し、外縁を形成している。5は底径8.4cm、6は底径8.7cm、7は底径11.4cm。

8～10は高台付の坏底部である。8、9の高台断面は「コ」の字状を呈し、10の高台はやや外向きに付けられている。8は底径7cm、9は底径9cm、10は底径9.6cm。

11は子持ちの高坏の坏部であろうか。坏部の蓋受けは低い。

その他の土器（第34図1～15）

1～5は青磁の破片である。1は外面にカキ目を施文する同安窯の青磁である。4は底径5.7cm、5は底径6.9cm。6～9は白磁の破片である。6、7は玉縁状の口縁を持つ白磁である。6の口径は16.5cm、7の口径は17.1cmを測る。9は底径4.2cm、10は底径6.6cm。11～13は陶器の破片である。13は底径4.5cmを測る。14は瓦質土器で底径は6.6cmを測る。15は染め付けの皿の底部である。底径9.9cm。

B調査区

礫層出土の縄文土器（第30図1～7）

1は浅鉢の黒色磨研土器である。2、3は突帯文土器の一群である。口縁部下には一条の低い三角突帯文を施文している。表裏は条痕文が残存している。4の深鉢形土器は口縁部に小波状の装飾文が付設している。5の口縁部下の屈折部で凹線文を持つ。7は胴部に屈曲部を持つ深鉢形土器である。表面には条痕文を残す。

粘土層出土の縄文土器（第31図1～2）（第32図1～2）（第33図1～11）

第31図1は深鉢形土器の口縁部～頸部の破片である。口縁部は大きく外に開きつつ緩く内湾する。口縁部の外面には細い細線が横、斜めに数条施文されている。口径約30cm、頸部は25.2cmである。第31図2は深鉢形土器の胴部の破片である。胴部に屈曲部を持ち、胴径は33cmを測る。

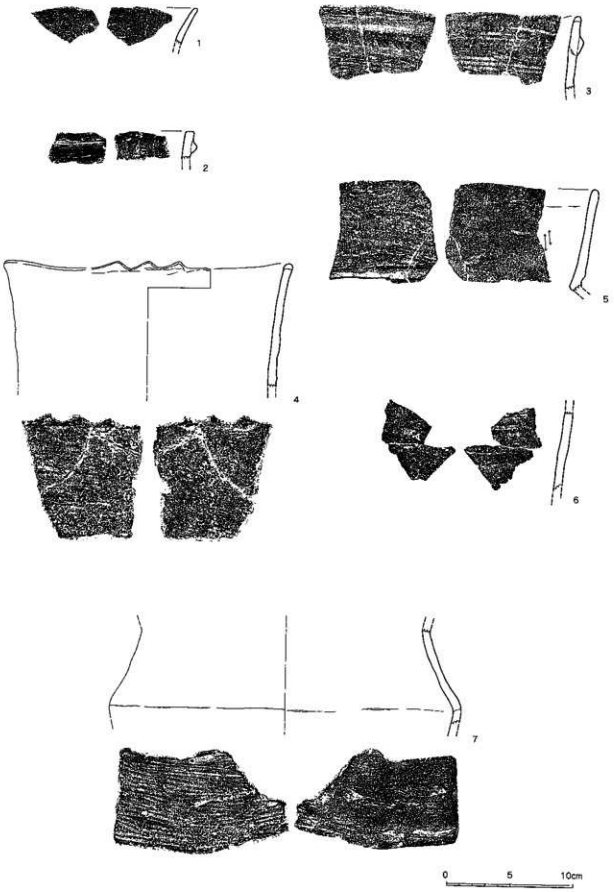
第32図1は深鉢形土器の胴部の破片である。胴部に屈曲部を持ち、胴径は23.4cmを測る。表面に条痕文を残し、内面は撫で調整されている。第32図2は黒色磨研の浅鉢形土器で、頸部～胴部の破片である。屈折部の胴部に二条の沈線を施文している。胴径は37.8cmを測る。

第33図1～3は深鉢形土器の口縁部の破片である。1は口径27.4cmを測る。4、5は胴部である。3の胴部径は29cmを測る。5は小型の深鉢であり、屈折する胴部径は13.2cmを測る。6は屈折する浅鉢形土器の胴部である。7は屈折する浅鉢形土器の胴部である。屈折部上部には二条の凹線文と細線状文を施文している。三万田式土器である。8～10は底部である。8は平底で径7.5cmを測る。9、10は上げ底である。良く研磨されており、9は底径3.3cm、10は底径6.9cmを測る。11は時期不明の縄文土器である。

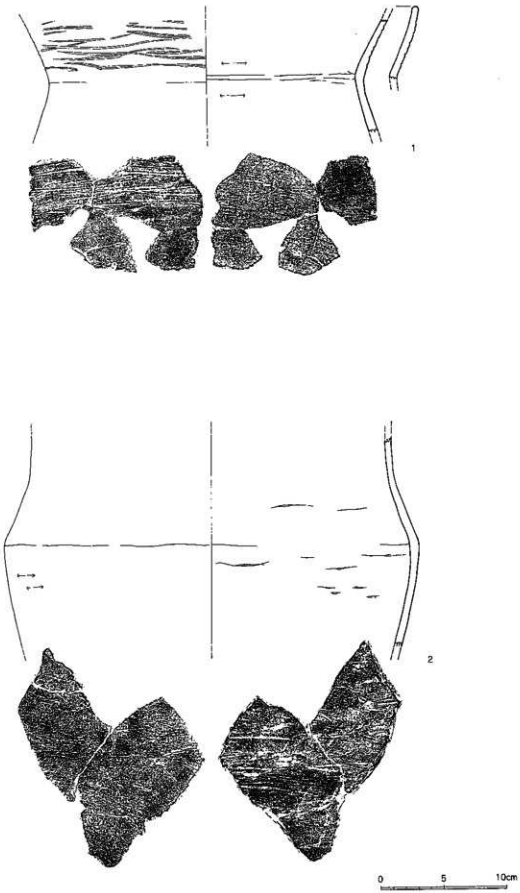
3．小　結

西王寺遺跡と毛見所遺跡は佐野川左右の低い河岸段丘に所在していた。西王寺遺跡は、中世の頃、西王寺が建立されていたが、大友氏と島津氏との戦いで焼失したという伝承がある。発掘調査の結果、時期不明の溝状遺構や、古墳時代のカマドを持つ竪穴住居跡を含む5基の竪穴と多数の柱穴群、時期不明の集石遺構1基が検出された。また、注目する出土遺物としては、赤褐色を呈する須恵器の甕がある。平行叩きに描き目を施し、内面にヘラ削り痕を残すもので、土師器との折衷的な様相を呈している。西王寺に関する遺構、遺物などは確認されていない。

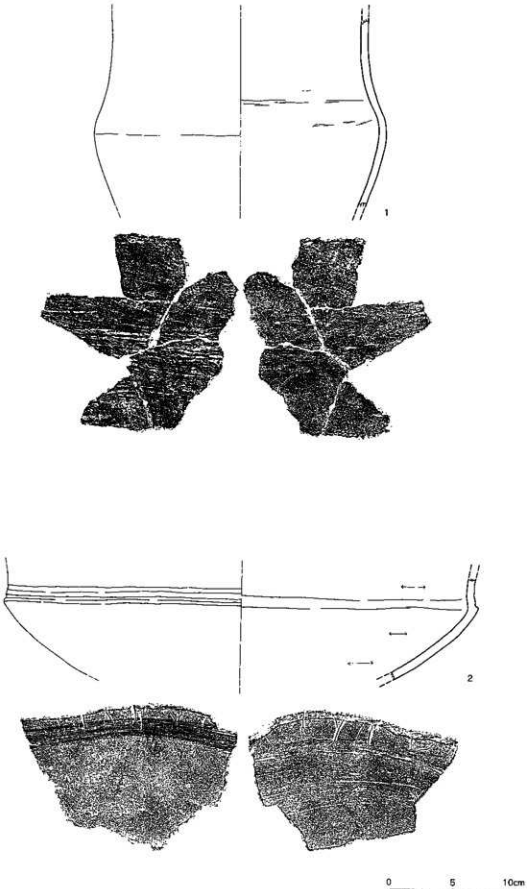
毛見所遺跡は、灰褐色の粘土が厚く堆積しており、顕微鏡によるプラントオパールの簡易観察でも水田面であった可能性は薄い。この粘土の堆積は約60～180cmもあるが、層中に薄い砂層が数枚挟まっており、河川の氾濫と堆積が繰り返された様相が認められた。発掘調査では、ローリングを受けた古代の須恵器や土師器の破片が出土している。注目される遺物としては、最下層の粘土層から、縄文晩期の刻目突帯文土器等が少量出土し、土器の内面には籾粒の圧痕が1粒付着していた。



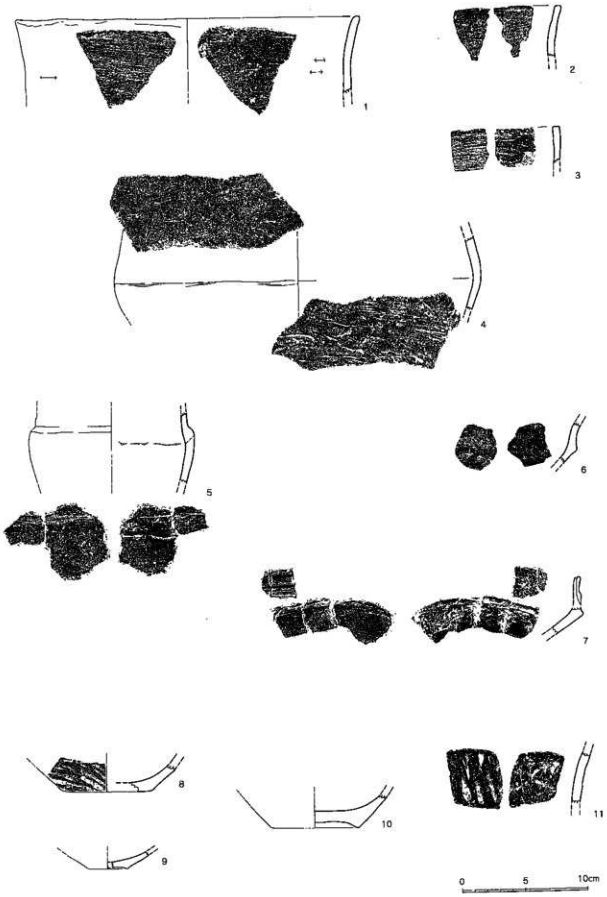
第30図　毛見所遺跡B区礫層出土縄文土器実測図（1／3）



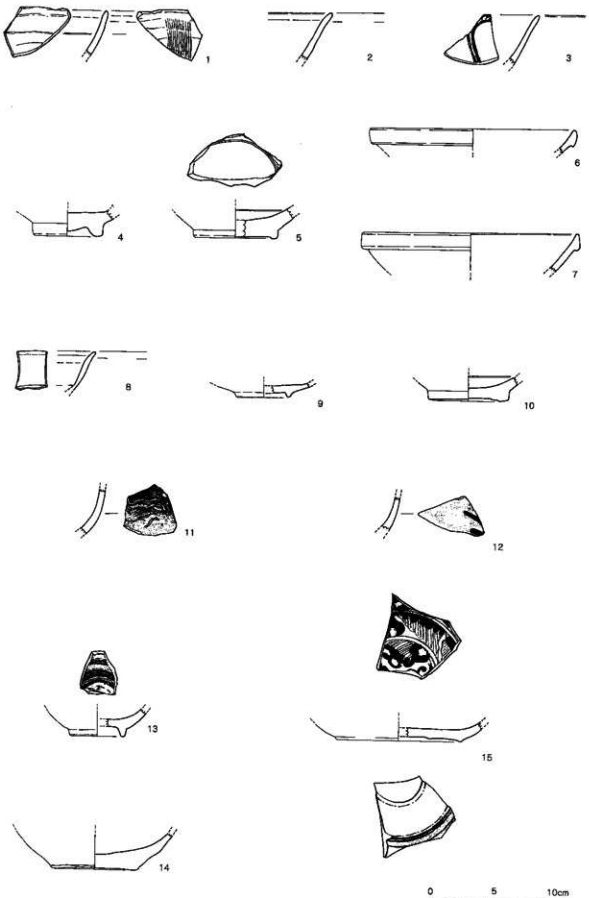
第31図　毛見所遺跡B区最下粘土層出土縄文土器実測図（1／3）



第32図　毛見所遺跡B区最下粘土層出土縄文土器実測図（1／3）

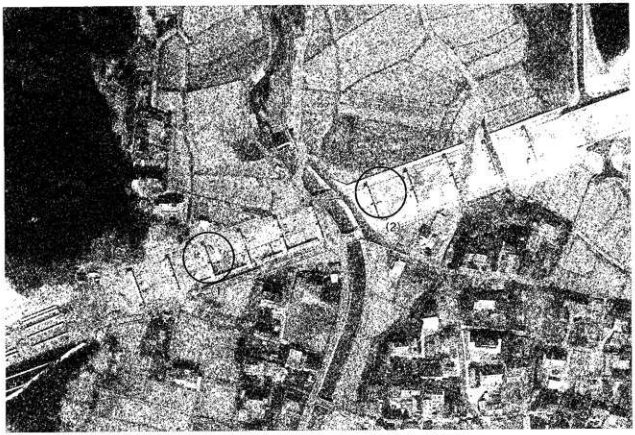


第33図　毛見所遺跡B区出土縄文土器実測図（1／3）

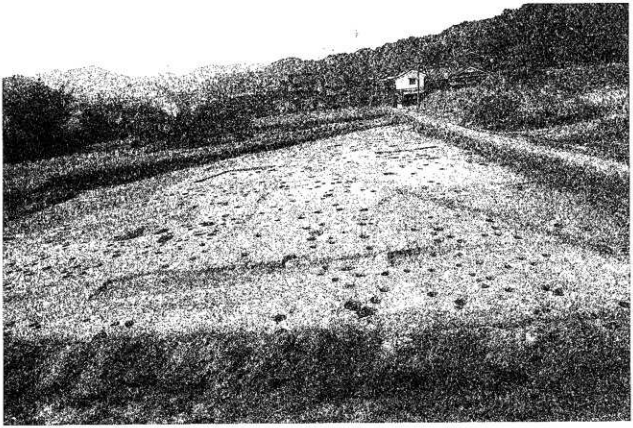


第34図　毛見所遺跡出土遺物実測図（1／3）

西王寺・毛見所遺跡写真図版



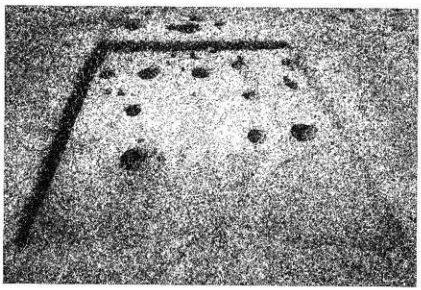
写真図版1　西王寺遺跡(1)・毛見所遺跡(2) 空中写真



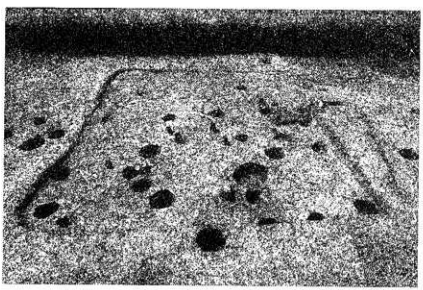
写真図版2　西王寺遺跡調査区近景（北方から）

写真図版

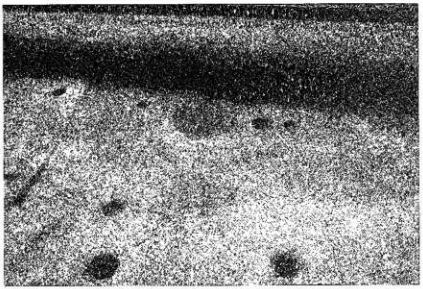
写真図版３　西王寺遺跡１号竪穴
（東方から）



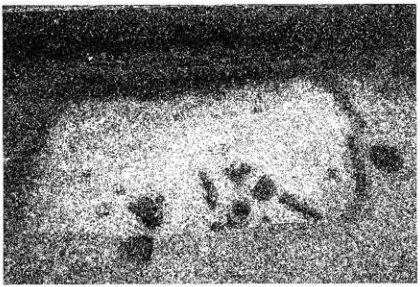
写真図版４　西王寺遺跡２号竪穴
（東方から）



写真図版５　西王寺遺跡３号竪穴
（東方から）



写真図版6　西王寺遺跡4号竪穴
（東方から）



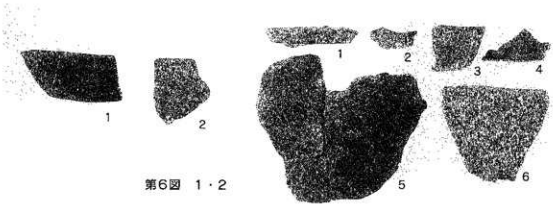
写真図版7　西王寺遺跡5号竪穴
（西方から）

写真図版8　西王寺遺跡作業風景
（東方から）

写真図版

写真図版9　集石遺構（西方から）

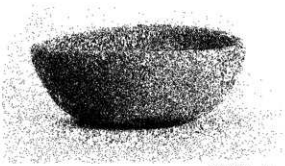
写真図版10　集石遺構断面
（南方から）



第6図　1・2

第10図　（1～6）

写真図版11　西王寺遺跡出土遺物



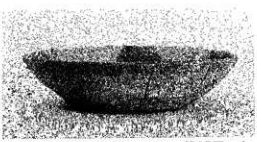
第13図　1

第13図　2

第15図　1

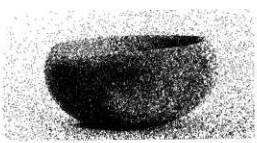
第15図　2

第15図　3



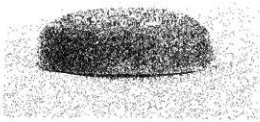
第15図　4

第15図　5



第15図　6

写真図版12　西王寺遺跡出土遺物

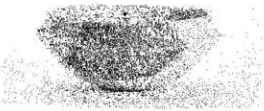


第15図　7

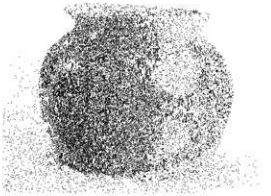
第15図　11

第16図　12

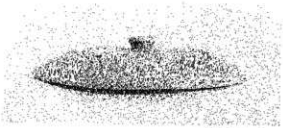
第16図　13・15



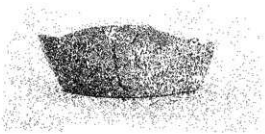
第17図　1



第17図　2



第17図　3

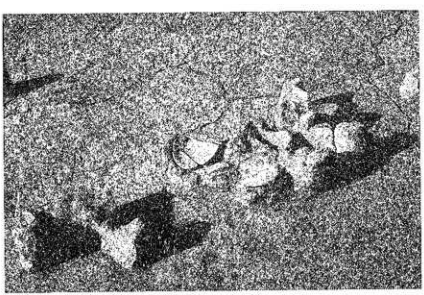


第17図　4

第18図　4

写真図版13　西王寺遺跡出土遺物

写真図版14　毛見所遺跡近景
（西方から）



写真図版15
毛見所遺跡遺物出土状態

写真図版16
毛見所遺跡遺物出土状態

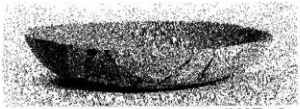
写真図版

写真図版17
毛見所遺跡土坑墓出土状態
（南方から）

写真図版18
毛見所遺跡最下粘土層発掘状態

写真図版19　毛見所遺跡
最下粘土層内縄文土器出土状態

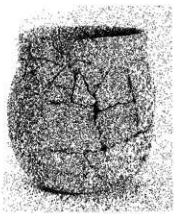
第23図　6



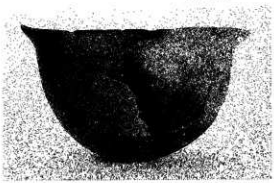
第23図　8

第24図　8

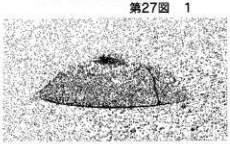
第25図　10



第27図　1

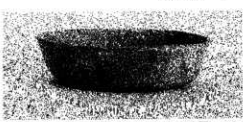


第27図　5



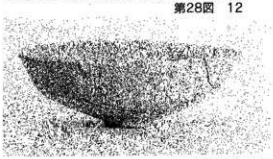
第28図　1

第28図　3

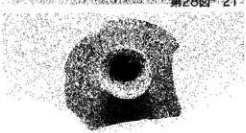


第28図　12

第28図　21



第28図　19

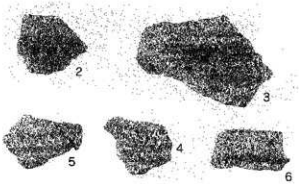


第28図　21

写真図版20　毛見所遺跡出土遺物

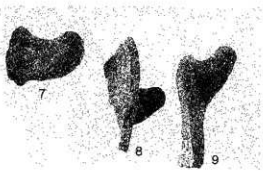
第21図　1

第21図1の籾粒痕拡大

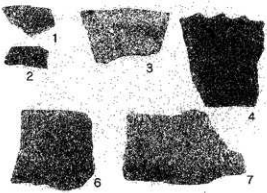


第22図　(2～6)

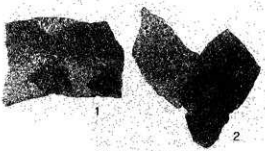
第25図　6



第26図　(7～9)



第30図　(1～7)



第31図　(1・2)

第32図　(1・2)

写真図版21　毛見所遺跡出土遺物

Ⅱ. 上久所遺跡

第1章 はじめに

調査経過

平成8年12月9日より上久所川を挟んだ東西の沖積地と上久所川西側の丘陵上にトレンチを設定して試掘を行った。その結果、丘陵上で室町時代を中心とする柱穴や土師器、中国明大の青磁腕などが検出されたため、平成9年度に本調査を行った。

調査対象面積は1,750㎡である。調査は重機を用い表土を約40㎝程除去した後に、10m×8mのグリッドを設定し、遺構・遺物の検出作業を行った。

調査の結果、掘立柱建物跡6基と柱穴多数を確認した。遺跡は近世の畑作により全体的に深い攪乱を受けており、遺物についてはその検出位置を確定することができなかった。調査は平成10年3月13日に終了した。

調査団の構成

上久所遺跡の調査体制（平成9年度）は以下のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会

調 査 員　後藤　一郎（大分県教育庁文化課課長）

清水　宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

村上　久和（　同　文化課副主幹）

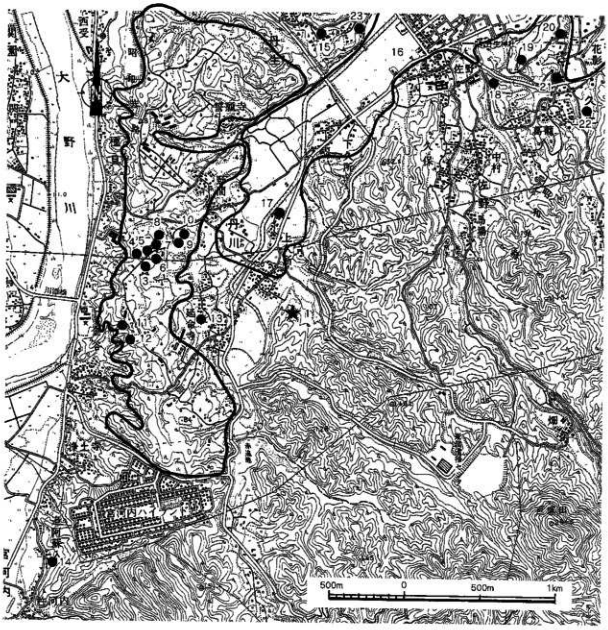
藤内　壽竹（　同　文化課主任）発掘調査担当

渡部　桂司（　同　文化課嘱託）

第2章　遺跡の立地と環境

上久所遺跡は大分県大分市大字丹川字上久所に所在するもので、北側には丹生台地、東側には戸塚山、西側には丹生台地と大野川、南側には赤迫池に面している。調査区は標高40～48mほどで、現代の集落が形成されている平坦地（標高約25m）よりわずかに高い。急峻な周囲の山と平坦地との境目に位置している。

本遺跡の西側に広がる丹生台地一帯には、数多くの遺跡が点在している。西に約1000mの所には野間古墳群（古墳）、約500mには延命寺遺跡（縄文他）が所在している。また、丹生台地は旧石器の包蔵地となっており、本遺跡でも旧石器時代の剥片が数点出土した。近世では、豊後国海部郡となっており、慶長5(1600)年から臼杵藩領。寛永11(1634)年の内検帳にでている久所村組久所村から分村したもので、文政6(1823)年当時は上久所村・下久所村に分かれており、上久所村は智願寺村・岡村との3村からなる岡組に属していた。水田は肥沃で赤迫池からの灌漑によって安定した生産を持っていた。明治4(1871)年に大分県に所属。明治9(1876)年、上久所村・下久所村が合併して丹川（あかがわ）村となる。丹川とは、水銀の異称「丹」の流れた川にちなんで命名されたものと考えられている。



第１図　上久所遺跡周辺遺跡分布図（1／25,000）

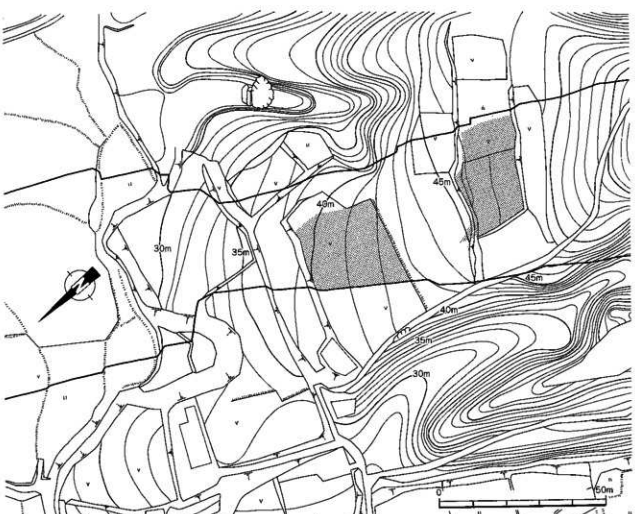
1.上久所遺跡（旧石器・中世・江戸）
2. 丹生遺跡群（旧石器）
3. 野間古墳１号墳（古墳）
4. 野間古墳２号墳（古墳）
5. 野間古墳３号墳（古墳）
6. 野間古墳４号墳（古墳）
7. 野間古墳５号墳（古墳）
8. 野間古墳６号墳（古墳）
9. 野間古墳７号墳（古墳）
10. 野間古墳８号墳（古墳）
11. 野間古墳９号墳（古墳）
12. 野間古墳10号墳（古墳）
13. 延命寺遺跡（縄文他）
14. 阿蘇入横穴墓郡（古墳）
15. 下遺跡（古墳）
16. 丹生川坂ノ市条理跡（古代）
17. 大友親善墓（中世）
18. 久土キリシタン墓（江戸）
19. 久土遺跡（弥生他）
20. 城下横穴墓群（古墳）
21. 久土横穴墓群（古墳）
22. 久土前田遺跡（古代）
23. 岡下横穴墓群（古墳）

第３章　調査の成果

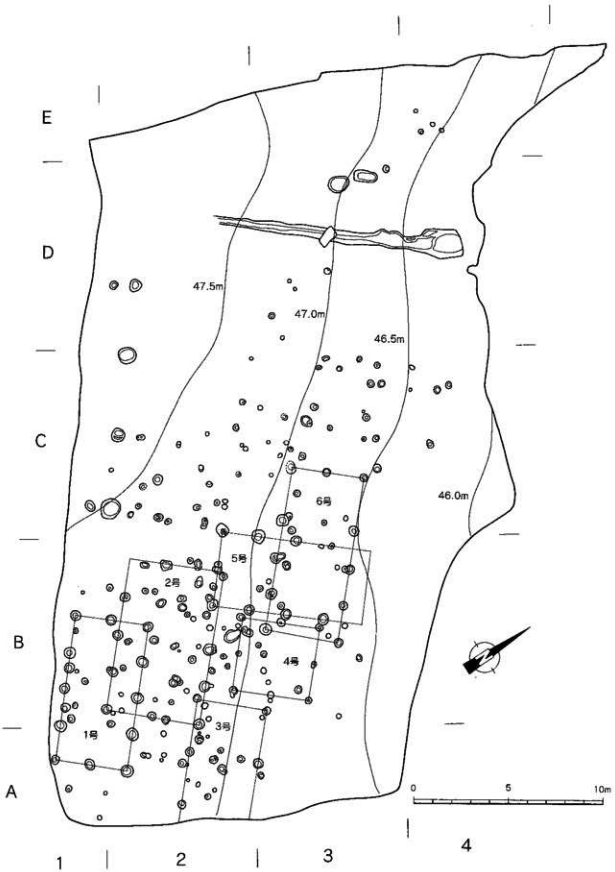
基本層序と遺構・遺物

調査区は上段が幅約22m、全長約40mで、遺構検出面の標高は45.83～48.015m。下段が幅約30m、全長約35mで、遺構検出面の標高は38.82～43.5mである。区内の土砂堆積状況は単純で、表土層（約50cm）の直下に遺構検出面がある。表土層は暗黒褐色土層で、遺物はほとんど含まれていない。遺構は、基盤層である赤褐色土層に掘り込まれた形で検出されている。遺物はその遺構中からわずかに検出されただけで、多くは確認されなかった。調査区内は、現在は竹林になっているが、ごく最近まで畑作が行われていた。そのため、深さ約30cm程の溝が確認できただけでも59条調査区内に走っており、その溝により遺構がかなり削られている。その中で、上段では250基の柱穴と４本の溝を検出した。その中から、数は少なかったものの、中世のものと考えられる遺物が検出された。下段でも21基の柱穴と、南北方向に走る約20条の溝が検出されたが、近世の陶磁器の破片が数点検出されただけで、下段の遺構は上段と比べ新しいと考えられる。そのため下段は遺構の検出を行ったのみで、主に上段の調査を中心におこなった。

また、上段のＢ－２グリッドから、表土の除去作業中に旧石器時代と考えられる流紋岩の剥片・石核が６点検出された。そのため、任意に抽出した２ヶ所を２ｍ×２ｍの範囲で約１ｍ掘り下げ、遺構・遺物の検出作業を行ったが、基盤層直上で検出された前述の６点以外には旧石器時代の遺物・遺構ともに検出されなかった。



第２図　上久所遺跡周辺地形図（1／1,000）



第3図　上久所遺跡遺構配置図（1／200）

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区内から６棟検出された。調査区内では多数の柱穴が検出されているため、他にも建物跡が数棟は存在すると思われるが、畝状の溝によりかなりの柱穴が削られているものと考えられ、実際に確認できたのは６棟のみであった。柱穴からは、中世の土師質土器と近世の陶磁器が検出された。ただ、細かな破片が多く、そのため時代を確実に特定できるものが少なかった。近世の陶磁器については畑跡に伴うものと思われる。

建物１（第４図）

調査区内でも最も標高の高い位置にある建物。主軸をＮ－51°Ｗにとる。桁行４間・梁行２間の建物。規模は桁間7.8ｍ、梁間3.9ｍで、柱間は桁行で1.9ｍである。柱の掘形はほぼ円形で、径50～60㎝、確認面からの深さは50～60㎝である。柱穴内から図示できるような遺物は出土しなかった。

建物２（第５図）

主軸をＮ－48°Ｗにとる。桁行４間・梁間２間の建物。規模は桁間7.9ｍ、梁間5.0ｍで、柱間は桁間2.0ｍ、梁間2.5ｍと、少し梁間が広くなっている。近世の畑跡のため２～３確認できなかった柱穴がある。柱の掘形はほぼ円形で、径40～60㎝、確認面からの深さは20～60㎝である。

建物３（第６図）

主軸をＮ－48°Ｗにとる。桁行は調査範囲外のため確認できず、梁行もおそらく２間と考えられるが、柱穴が確認されておらず定かではない。柱間は梁間が3.8ｍで、柱間は桁行2.8ｍ、梁行で3.8ｍである。柱の掘形はほぼ円形で、径40～50㎝、確認面からの深さは20～40㎝である。

建物４（第７図）

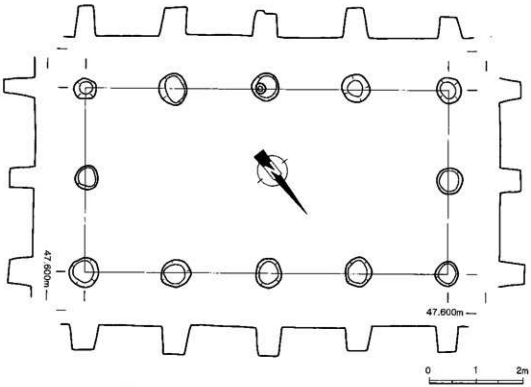
主軸をＮ－40°Ｅにとる。桁行２間・梁行２間の建物。規模は桁間4.1ｍ、梁間3.9ｍで、柱間は桁行・梁行ともに2.0ｍである。柱の掘形はほぼ円形で、径30～40㎝、確認面からの深さは10～30㎝である。調査区内では標高の低い位置にあるため、かなり削平されており、柱穴の形など明らかでない点もある。

建物５（第８図）

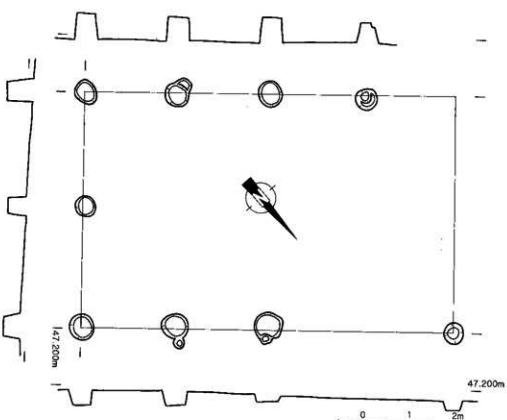
主軸をＮ－36°－Ｅにとる。桁行（４間）・梁行２間の建物。規模は桁間7.9ｍ、梁間4.0ｍで、柱間は桁行で2.0ｍである。柱の掘形はほぼ円形で、径50～60㎝、確認面からの深さは20～60㎝である。他の建物と違い南北棟となっており、建物１と直角の向きになる。

建物６（第９図）

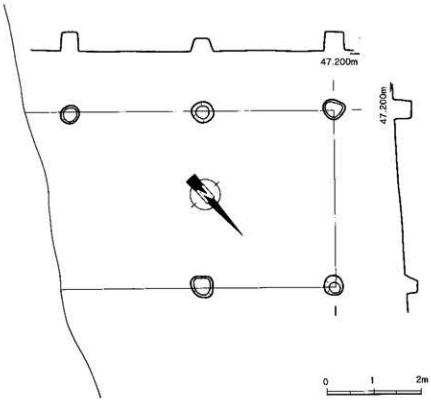
主軸をＮ－47°Ｗにとる。桁行４間・梁行２間で、本遺跡内では最大規模の建物。規模は桁間8.8ｍ、梁間3.9ｍで、柱間は桁行で2.0～2.8ｍである。柱の掘形はほぼ円形で、径40～60㎝、確認面からの深さは10～30㎝である。遺跡の北東部に位置していたためかなり削平されており、確認できなかった柱穴もある。



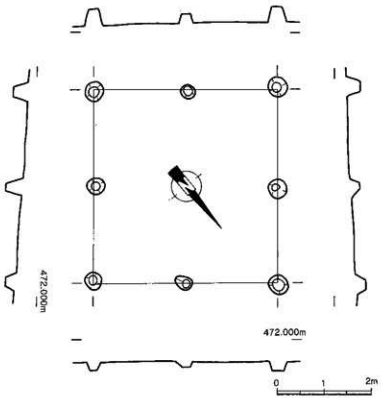
第4図　上久所遺跡1号掘立柱建物跡実測図（1／80）



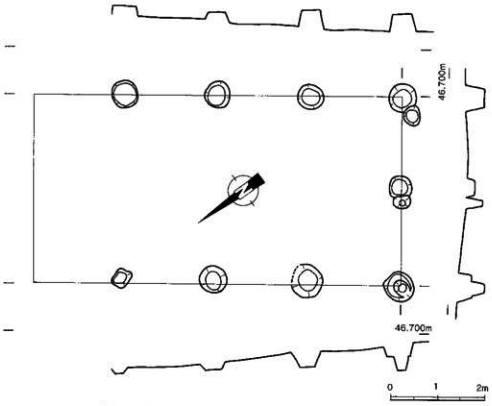
第5図　上久所遺跡2号掘立柱建物跡実測図（1／80）



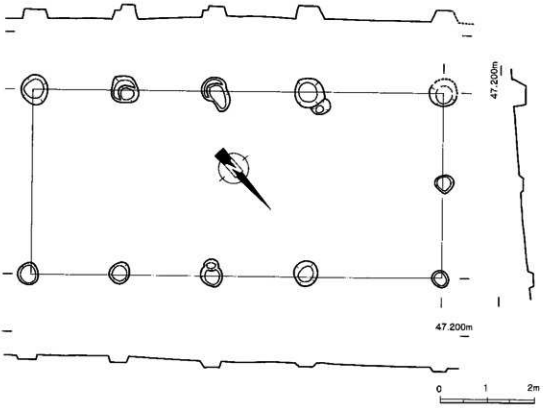
第６図　上久所遺跡３号掘立柱建物跡実測図（1／80）



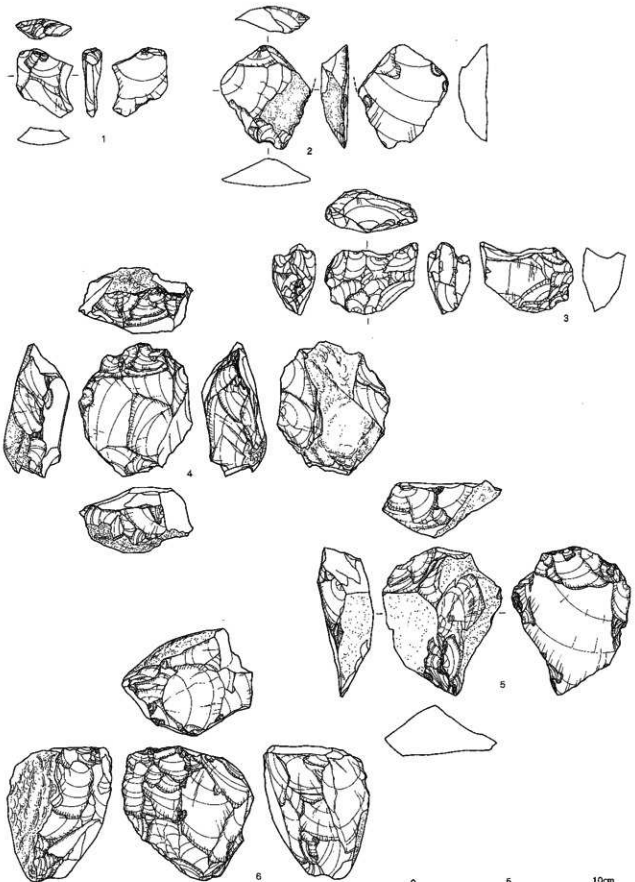
第７図　上久所遺跡４号掘立柱建物跡実測図（1／80）



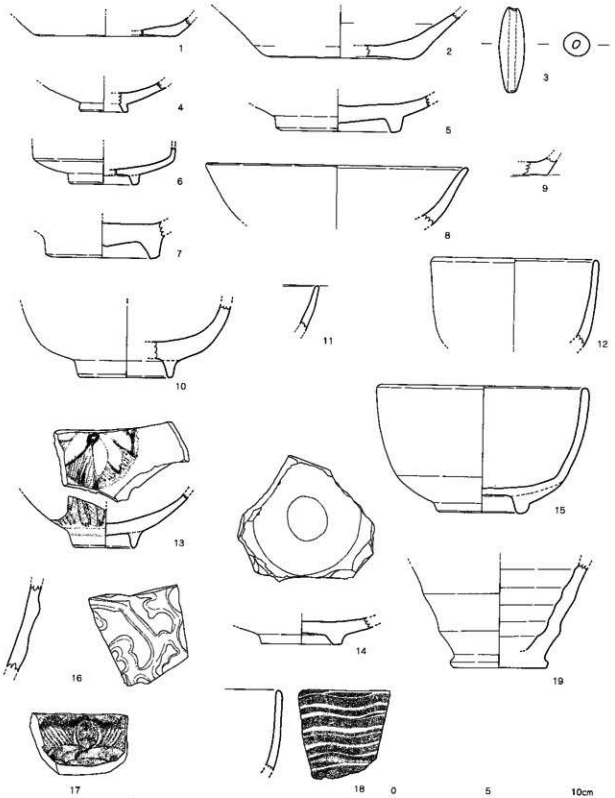
第8図　上久所遺跡5号掘立柱建物跡実測図（1／80）



第9図　上久所遺跡6号掘立柱建物跡実測図（1／80）



第10図　上久所遺跡出土遺物実測図（1）（1／2）



第11図　上久所遺跡出土遺物実測図 (2) (1／2)

出土遺物

流紋岩では、剥片が2点、石核が4点の6点が検出された。何れも母岩は別と考えられ、接合も確認できなかった。その全てが、中世の土師質土器や近世の陶磁器と同じ面で確認されており、また、基盤層の下からも何も確認されなかった。従ってこの遺跡で石器の製作が行われたと考えることはできない。本遺跡の周辺には旧石器時代の包蔵地である丹生台地があり、そこから何らかの形で持ち込まれたものであろう。

本遺跡では、19点の土器類が確認された。遺構のところでも述べたが、ほとんどが16世紀から18世紀のものと考えられ、住居跡に伴うものではないようである。また、住居跡から土師質土器の小破片が遺構にともなって数点検出されているが、ここでは割愛している。

小　結

確認された遺構は中世の柱穴が271基、溝が63条である。溝については近世～近代の畑跡とほぼ確認されており、その調査報告は割愛している。柱穴についてはその配置から6基の住居跡を確認した。住居跡については面積が10.64～39.5㎡、4×2間の建物が4軒、2＋×2間の建物が1軒、2×2間の建物が1軒である。どれもほぼ方向を同じくしており、同時代の住居跡と推測される。だた、伴って出土した遺物からはその確かな年代は確定できなかった。

Ⅲ. 浄土寺遺跡

第1章 はじめに

調査経過

大分県大分市大字宮河内字浄土寺に所在する浄土寺遺跡の一字一石塔の発掘調査は、国道197号線の東バイパス建設工事に伴う、事前の発掘調査として実施された。

浄土寺遺跡の一字一石塔は、県道坂ノ市・中戸次線のすぐ傍らにある宮河内字浄土寺の狭い共有地にあり、「金光明最勝王経石書塔」という経碑が建てられていた。

発掘調査はこの経碑や御神燈の移転後に実施された。調査面積は約25㎡で、調査期間は平成9年2月下旬に実施された。調査の結果、「金光明最勝王経石書塔」の碑の下には土坑があり、礫石経が69,427個詰まっていた。

調査団の構成

浄土寺遺跡の調査体制（平成9年度）は次のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会

調 査 員　後藤　一郎（大分県教育庁文化課課長）

　　清水　宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

　　栗田　勝弘（大分県教育庁文化課副主幹）発掘調査担当

　　近藤　晃弘（大分県教育庁文化課嘱託）

発掘調査を実施するにあたり、浄土寺地区の人々を1日に3人程度、発掘調査作業員として日々雇用した。

第2章　遺跡の立地と環境

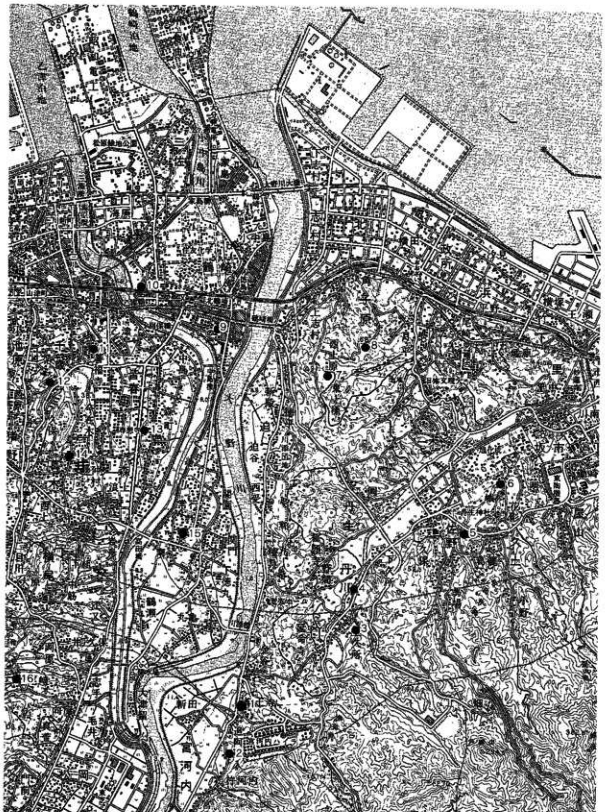
大分市の東部、大野川右岸は、川に沿う狭い段丘上を県道坂ノ市・中戸次線が通っている。そのすぐ東側の標高50mの丹生台地は、かつて、前期旧石器論争の舞台となった丹生遺跡群や、前方後円墳を含む10余基の野間古墳群などが所在する有望な遺跡包蔵地が展開している。

今回調査対象とした遺跡は、丹生台地の南端、大分市大字宮河内字浄土寺の共有地に所在する近世の一字一石塔である。共有地は標高約10mで、すぐ東側には急傾斜の崖が迫り、その崖面を一部削って狭い平坦面を形成している。その中央部に「金光明最勝王経石書塔」の経碑が建立されていた。経碑の下には土坑があり、一字一石経がびっしりと詰まっていた。経碑に紀年名はないが、2基の御神燈は天明2年(1782)と寛政3年（1792）の奉納であり、これらに余り遠くない時期の所産と推察できる。

一字一石経の埋納行為の起源を辿ると、その延長線上には、間欠的ながら、中世の納入孔を持つ宝塔や国東塔をへて、12世紀前半に末法対策を契機に活発化する経塚造営へと関連付けることができる。

県内の経塚遺跡は、現在53件（48遺跡）に整理できるが、その殆どは、各八幡社や天台寺院、宇佐・国東の六郷満山寺院等の境内に、銅製経筒や陶製経筒を埋納した経塚が多い。

浄土寺遺跡周辺の12世紀代の経塚遺跡をみると、北方には大分市政所経塚がある。出土遺物は散逸しているが、江戸時代の後藤碩田の『尚古延寿』や『大化帖』に、長治元年（1104）銘の銅経筒の出土が報告されている。経筒には勧進僧の「慶勝」の名が刻まれており、山香町の永保3年（1083）銘の津波戸山水月寺出土の銅経筒にも、「慶勝」の名が確認できる。これを同一人物と仮定すると、勧進僧の動態が注目される。また、浄土寺遺跡東方の九六位山の山頂付近には、九六位山円通寺経塚がある。銅経筒や越州窯の陶製経筒、湖州鏡や和鏡、宋銭が外容器と伴に複数出土している。一方、大野川を越えた西方に



第1図　浄土寺遺跡の周辺主要遺跡分布図（中世～近世）(1／50,000)

は、大分市高城の高城観音経塚がある。四段積上げ式銅経筒が出土している。

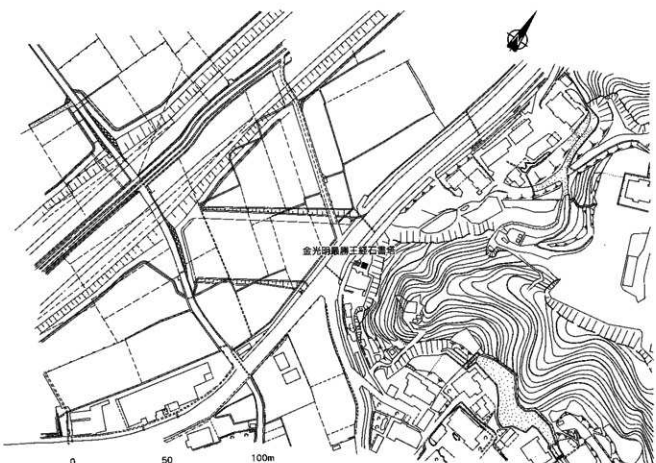
次に続く中世をみると、13世紀から14世紀は経塚造営の衰退期にあたり、経筒の類例資料に乏しい。その中でも、野津町のシシ権現宝塔内出土の貞和４年（1348）銘の小型経筒は、経塚から宝塔納入へという変遷の過渡期的な様相を備えたものと推察することができる。

一方、中世の宝塔納入から近世の一字一石塔への変遷も、不明な点が多いが、わが国最古の一字一石塔の一つとして、大分県朝地町上尾塚八角石幢は有名である。暦応２年（1339）銘のもので、八角石幢には「浄土三部経一字一石」「奉読誦法華経三十三部」「□□□光明真言万三千」「奉書写法華経七部」と刻まれ、石幢の保存修理の際に一字一石経が発見されている。

一字一石経の埋納遺跡の発掘調査は事例に乏しく、これまで調査された遺跡は、大分市高崎の女狐近世墓地、大野町大字大原の二本木遺跡、大分市松岡の尾崎遺跡等である。また、『竹生村誌』によると、大分市大字原の假屋が鼻経塚では、享保４年（1719）の一字一石経が、かつて発掘されたというが、県内での発掘調査は５例に過ぎないのが現状である。

しかし、一字一石塔は、神社・寺院の境内周辺、墓地の周辺等に点在しており、意識的に探すと普遍的に確認できるものである。浄土寺遺跡の周辺でも、阿蘇入横穴古墳群の前に、文政５年（1822）の「大乗妙典・法華経一部埋之・日本廻国六十六部臼杵領宮河内村本蔵」の石塔が遺存している。

一字一石経の埋納行為は全国的にみても近世を中心とした庶民信仰の所産であるが、埋納の目的等は必ずしも明確に認識できるとは限らない。浄土寺遺跡の「金光明最勝王経石書塔」建立の契機や目的も推測の域を出ていないのが現状である。



第２図　浄土寺遺跡周辺地形図（1／2,000）

第３章　調査の成果

浄土寺遺跡には「金光明最勝王経石書塔」と刻まれた中を墨書で埋めた経碑が建立されていた。碑には紀年名はないが、本体は幅42.5㎝、厚さ36.3㎝、帆の高さは138.3㎝の凝灰岩製であり、蓮華文を描いた台座と台石からなる。経碑は狭い共有地に建てられ、共有地入口の２基の御神燈は、天明２年(1782)と寛政３年（1792）の奉納とあり、この一字一石塔は18世紀後半の所産と推察できる。

埋納土坑

「金光明最勝王経石書塔」の経碑の下部構造として、礫石経の埋納土坑が検出された。埋納土坑は地表面から約20㎝の表土を掘削すると検出できる。

土坑の平面プランは、外枠で110㎝、内枠で90㎝の隅丸の方形を呈する。確認面から底面までは、60～80㎝の深さがある。一字一石経は、この土坑の床面から高さ60㎝の範囲に、手の平に納まる扁平な河原石が、びっしりと詰まった状態で検出された。そして、一字一石経の埋納上面には、黄褐色の山土が20㎝の厚さに被覆した状態であった。

一字一石経

一字一石経は手のひらに乗るほどの小石であり、大きさはほぼ統一されていた。埋納された礫石の総数は69,427個を数えた。その内、文字の鮮明な礫石は456個、文字の判明不可能な礫石は517個、文字の消えてしまっている礫石は68,458個である。

文字の鮮明な礫石は456個であり、その殆どは一字１点の割合が多い。その内訳をみると、１点の出土は155種類、２点の出土は42種類、３点の出土は17種類、４点の出土は４種類、５点の出土は９種類、６点の出土は６種類、７点の出土は３種類、８点の出土は２種類、９点の出土はなし、10点の出土は１種類、11点の出土は２種類となる。

判読できた文字を見ると次のようになる。

１点の出土は、人・刀・二・入・八・干・山・女・及・元・升・切・日・比・无・天・六・仂・以・去・玉・句・示・正・他・打・冬・尼・平・北・令・年・安・灰・假・缶・共・死・戌・而・如・汝・多・有・戒・究・冏・劫・更・其・空・災・使・所・初・松・呪・昔・陀・底・突・長・彼・朋・畏・界・皆・恒・茶・哉・昨・室・首・洲・養・松・食・持・宣・前・即・怒・毗・品・記・座・修・眞・神・旃・草・通・能・埒・竟・現・國・宿・祥・慈・常・淨・惜・船・達・婆・復・欲・團・喜・堅・斯・熟・曽・智・報・惑・遣・勤・業・殿・稙・塔・當・福・興・雷・演・慣・誓・漸・影・億・緊・暫・頸・説・徳・輪・壞・濃・謨・應・厳・耨・醫・隨・豊・禮・難・薬・勸・釋・屠・頁の155種類

２点の出土は、一・及・三・五・中・不・世・吉・光・至・出・成・地・言・往・供・音・咸・香・相・師・語・時・蜜・越・勝・尊・等・悲・菩・誉・像・緑・歯・摩・華・願・離・蘇・寶・辯・聽の42種類。

３点の出土は、十・子・上・千・亦・在・此・我・身・住・金・者・清・量・爾・羅・護の17種類。

４点の出土は、行・非・衆・渡の４種類。

５点の出土は、王・水・見・月・明・來・詞・善・經の９種類。

６点の出土は、大・牢・為・得・経・諸の６種類。

７点の出土は、天・若・薩の３種類。

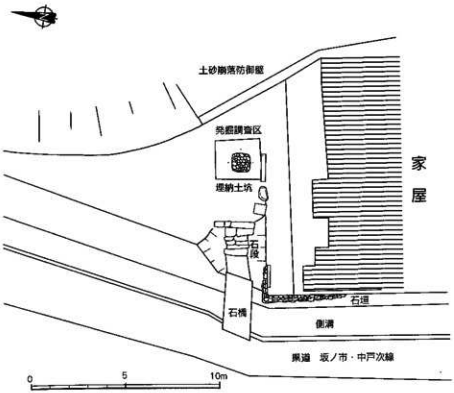
８点の出土は、是・無の２種類

９点の出土は、なし

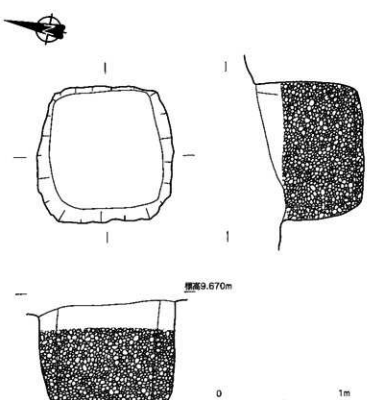
10点の出土は、法の１種類

11点の出土は、生・佛の２種類

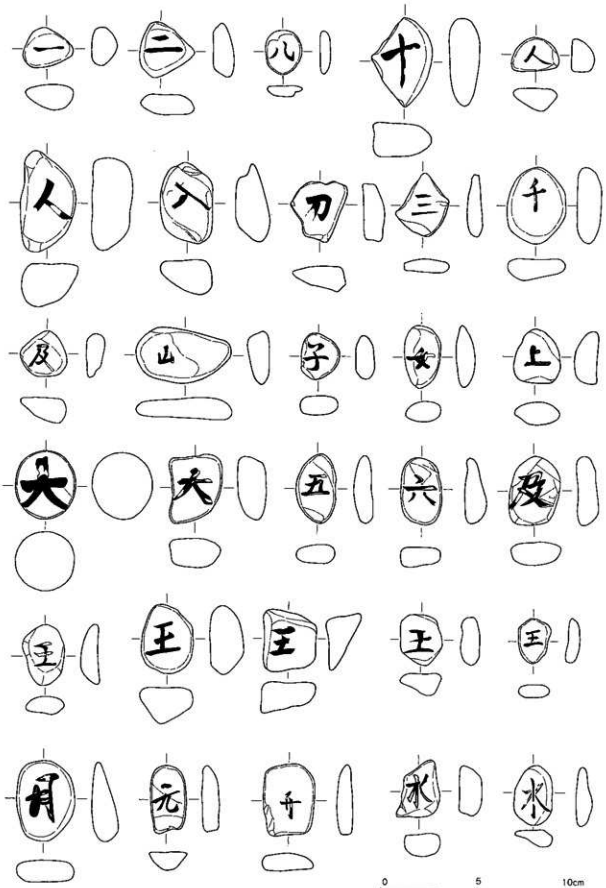
以上である。



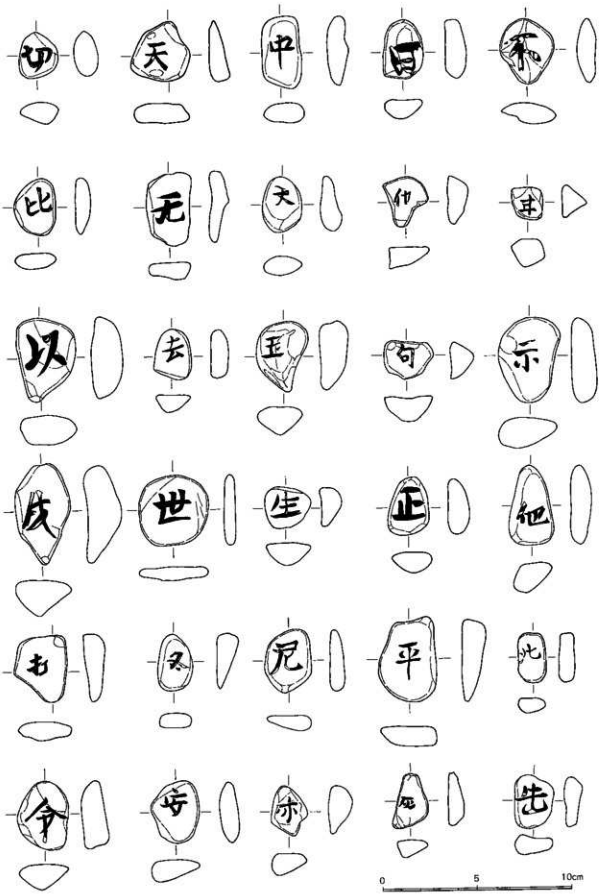
第3図　浄土寺遺跡調査区実測図（1／200）



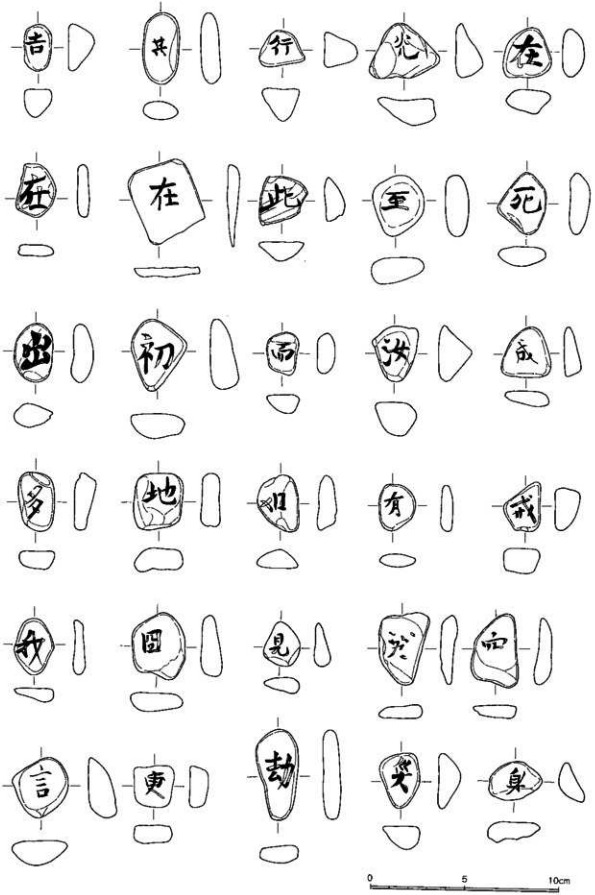
第4図　浄土寺遺跡「金光明最勝王経石書」埋納土坑実測図（1／30）



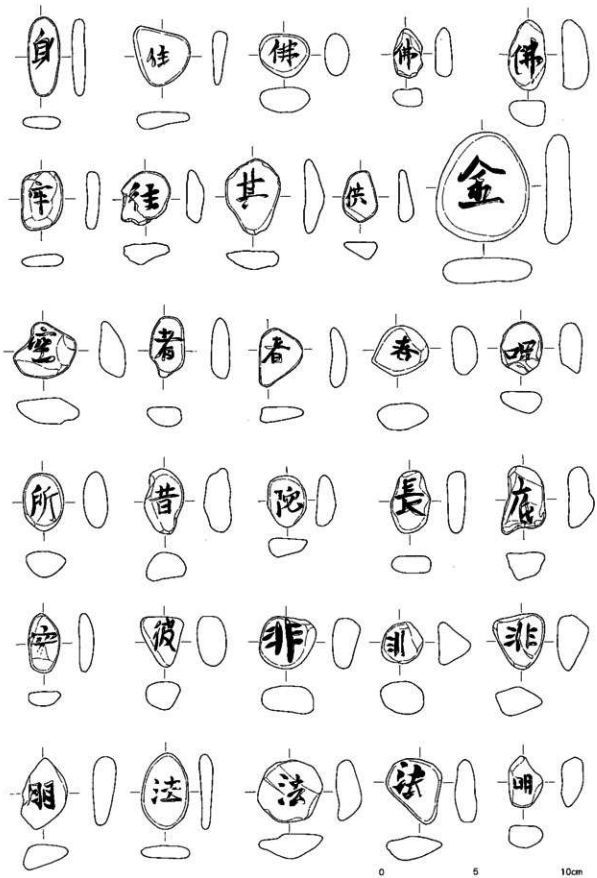
第5図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



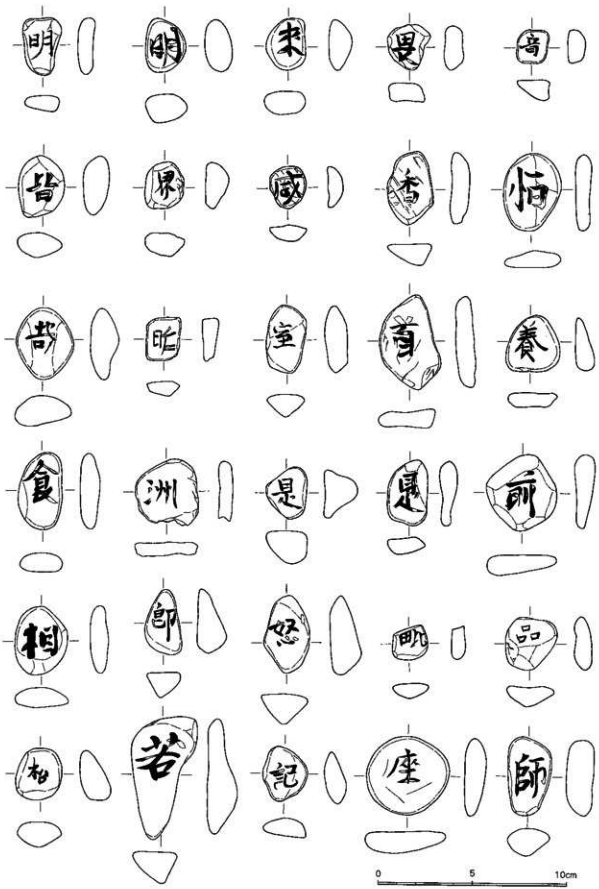
第6図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



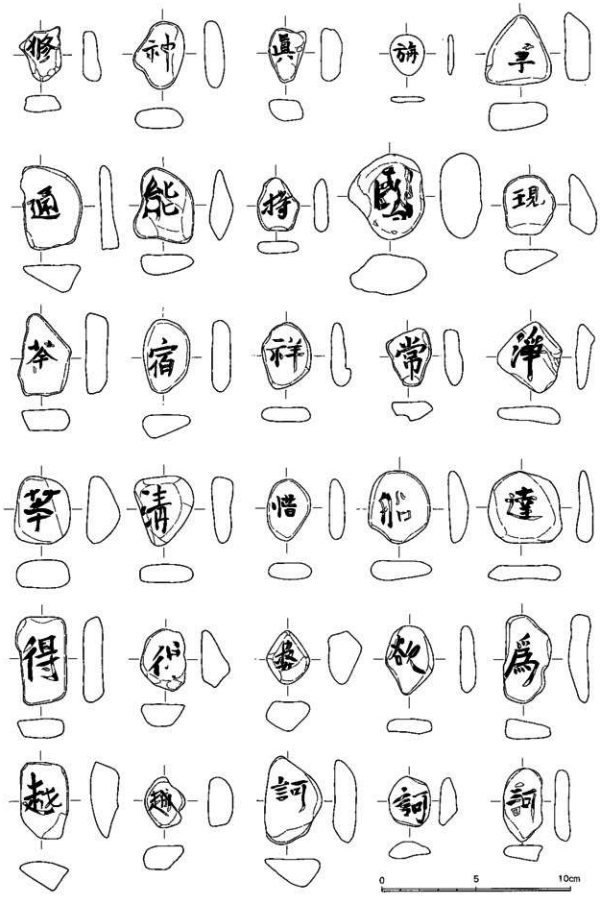
第7図　浄土寺遺跡出土裏石経実測図（1／2）



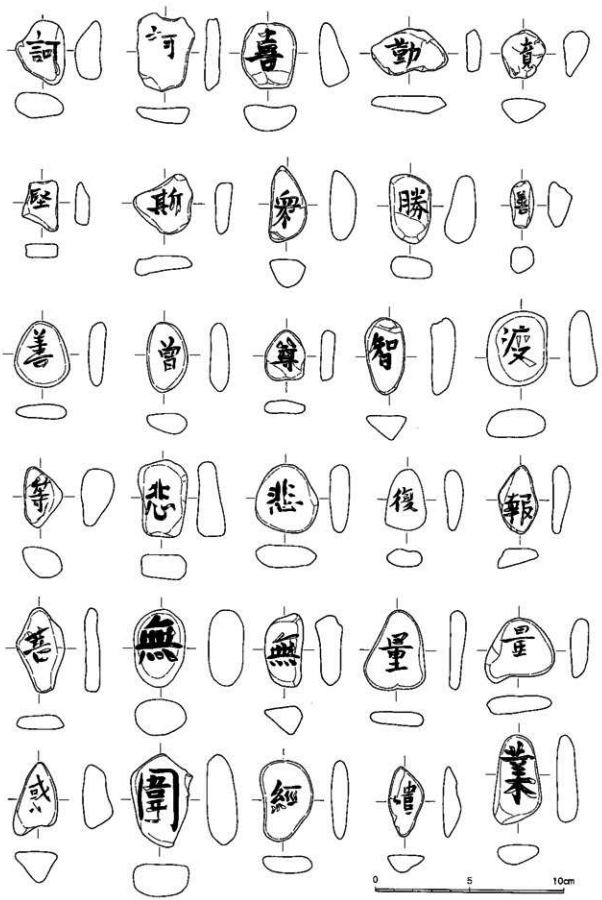
第8図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



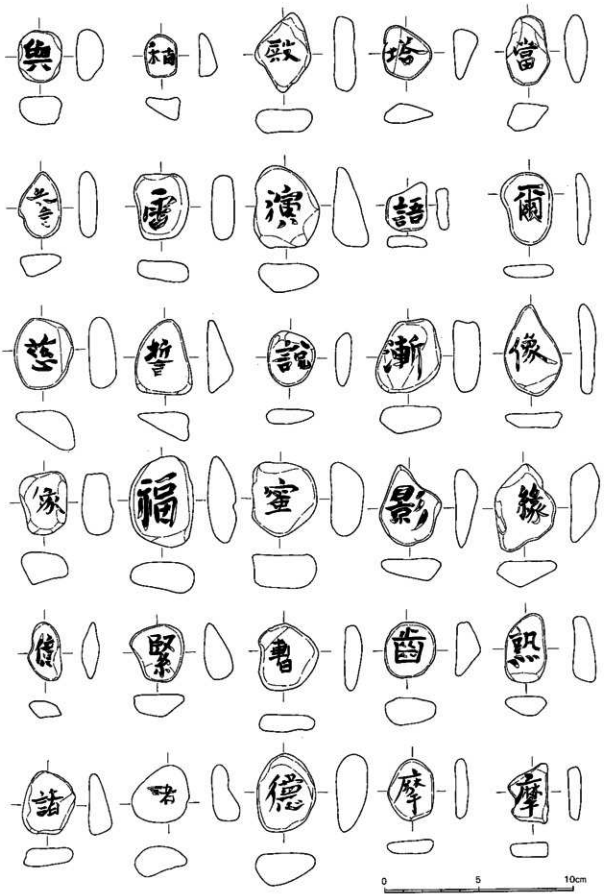
第9図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



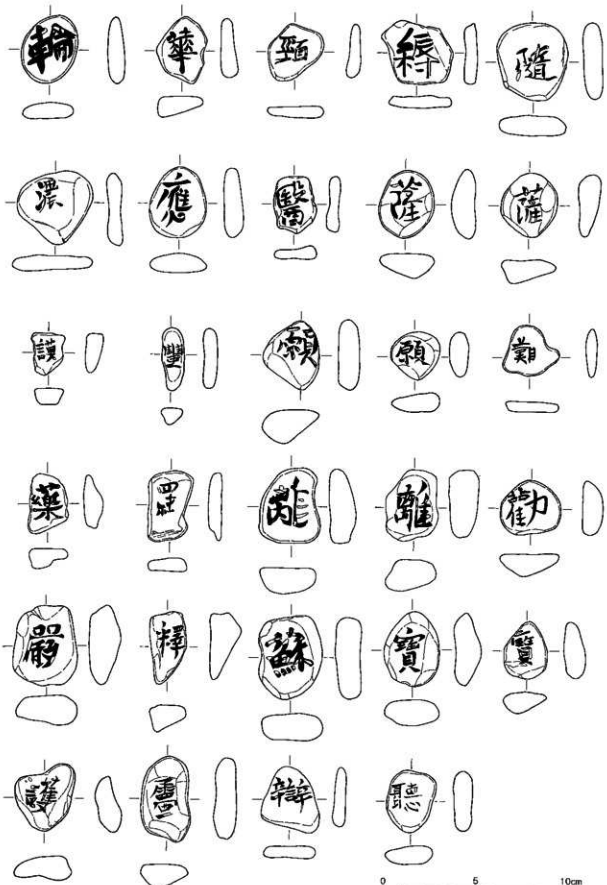
第10図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



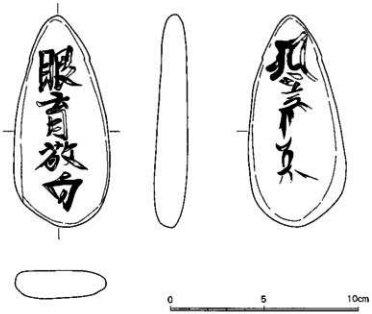
第11図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



第12図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



第13図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）



第14図　浄土寺遺跡出土礫石経実測図（1／2）

また、注目される遺物として、傑か１例ではあるが、縦11cm、横5cmの楕円状の扁平礫に「眼育敬白」とあり、その裏面には梵字らしきものが描かれていた。「眼育」とは一字一石経を書写し埋納した僧侶の名である可能性も推察される。

金光明最勝王経は「大唐三蔵沙門義浄奉制譯」によると、第１巻～第10巻に収録されており、その字数は凡そ63,643字に数えられる。一方、浄土寺遺跡の「金光明最勝王経石書塔」に埋納されていた礫石は69,422個である。その差は5779個となる。今回は、経典の同一文字数をコンピュータでグラフ化して比較するところまでは至っていないが、将来的には「金光明最勝王経石書塔」に埋納されていた経典を正しく弁別することも不可能ではなさそうである。

小　結

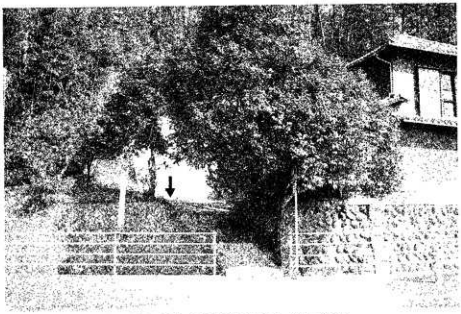
一字一石塔に埋納された経典は、全体的にみても法華経が主体となるものが多く、金光明最勝王経を埋納した事例は稀有である。埋納行為は近世を中心とした庶民信仰の所産であるが、埋納の契機や目的等、その趣旨を明確に記録した経塔などは少なく、何らかの供養塔として認識されてきた。

浄土寺遺跡の「金光明最勝王経石書塔」建立の契機や目的も推測の域を出ていないのが現状である。金光明最勝王経は、仁王経や法華経と伴に護国三部経と呼ばれ、古くから国家鎮護の妙典として認識されてきた。

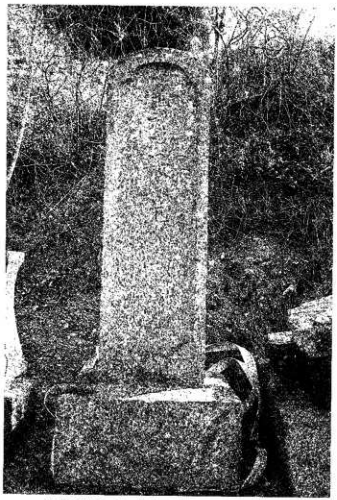
浄土寺の「金光明最勝王経石書塔」を守ってきた地区の人々は、大野川の洪水災害や飢饉をもたらす虫除け等、禍をなくし五穀豊穣と生活安穏の一念からこの「石書塔」が建てられたと認識している。対岸の大分市松岡の尾崎遺跡の一字一石塔は、「ムシ塚」と俗称されており、同じような趣旨で建てられたのかもしれない。

浄土寺遺跡写真図版

写真図版1　浄土寺遺跡空中写真

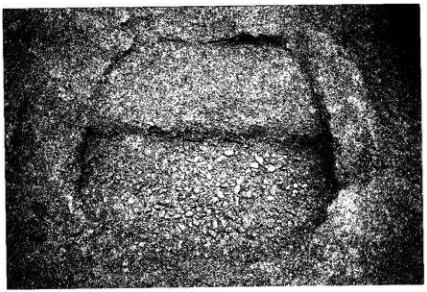


写真図版2　浄土寺遺跡調査区近景（西方から）

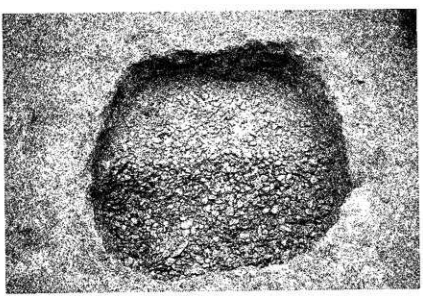


写真図版３　「金光明最勝王経石書塔」移転後

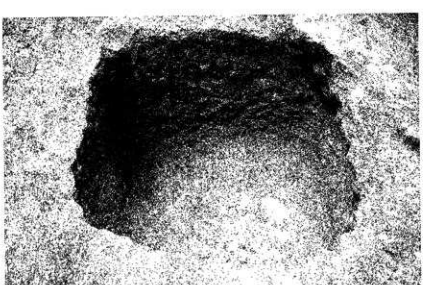
写真図版４　浄土寺遺跡「石書塔」の下の遺構検出状況



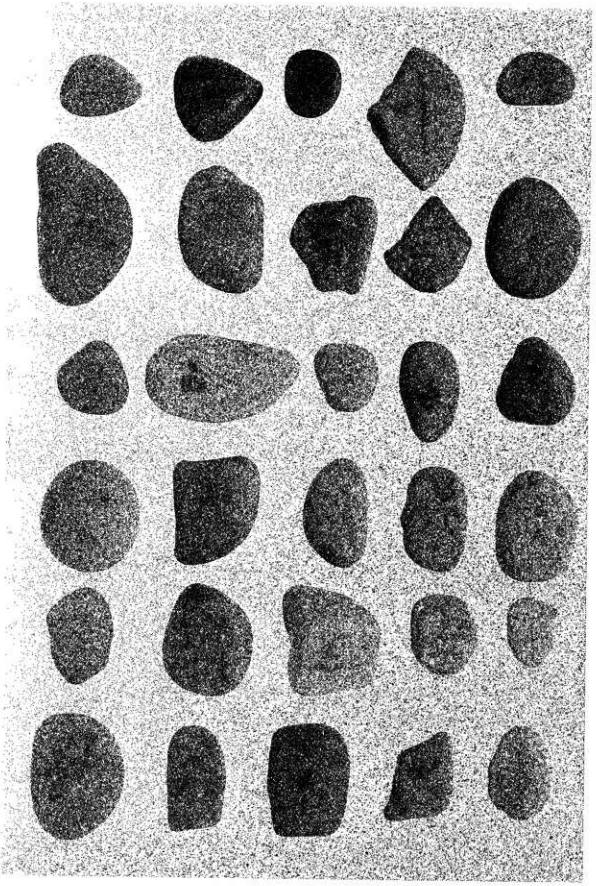
写真図版5　浄土寺遺跡
一字一石経埋納土坑
（西方から）



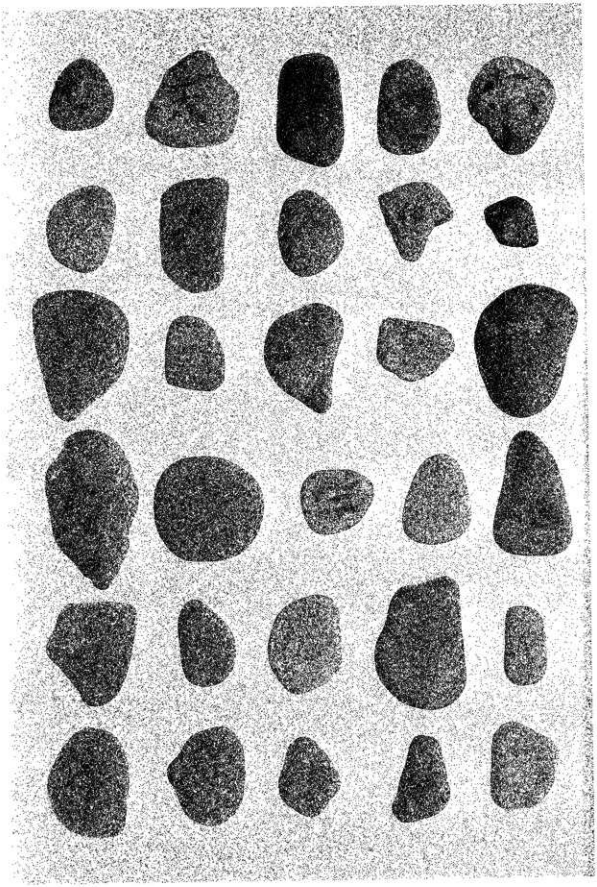
写真図版6　浄土寺遺跡
一字一石経埋納状態
（西方から）



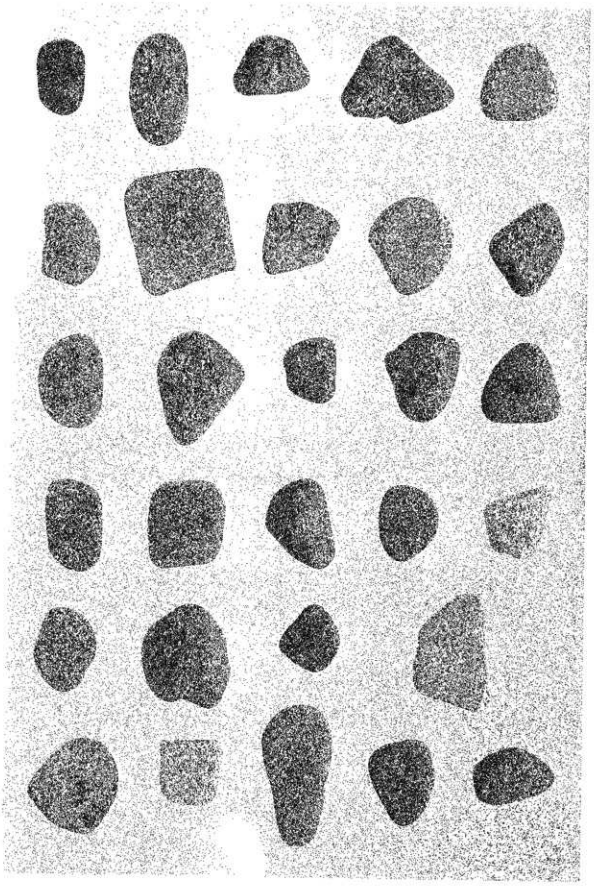
写真図版7　浄土寺遺跡
一字一石経埋納土坑
（北方から）



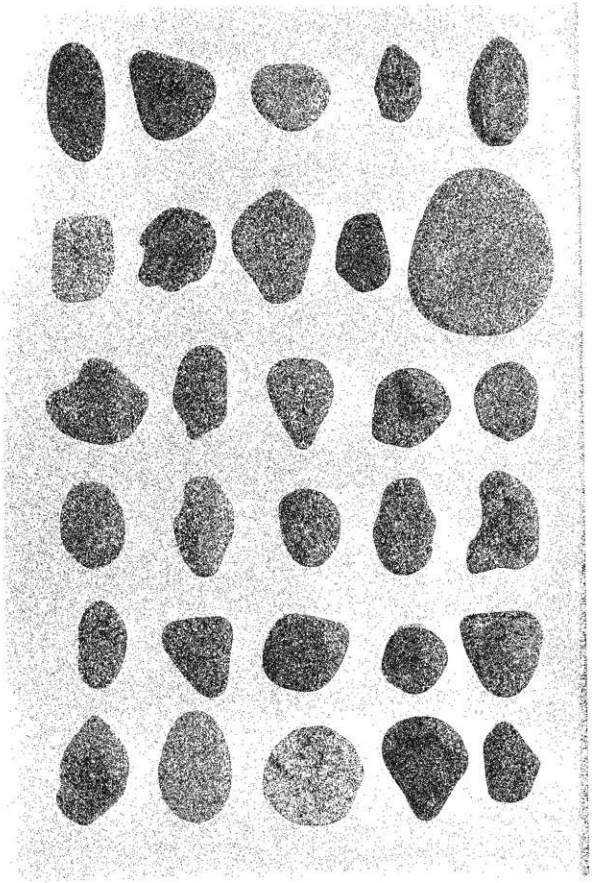
写真図版8　浄土寺遺跡出土礫石経（第5図）



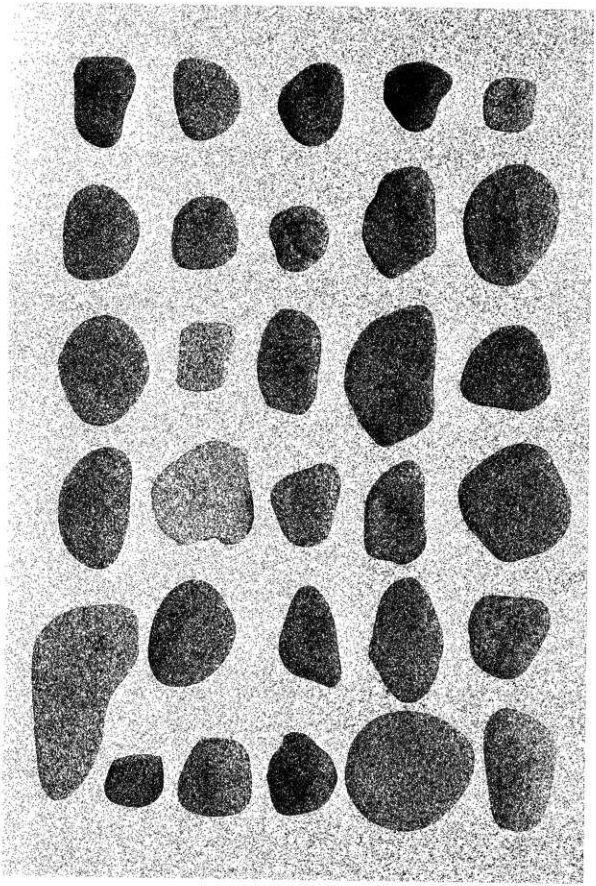
写真図版9　浄土寺遺跡出土礫石経（第6図）



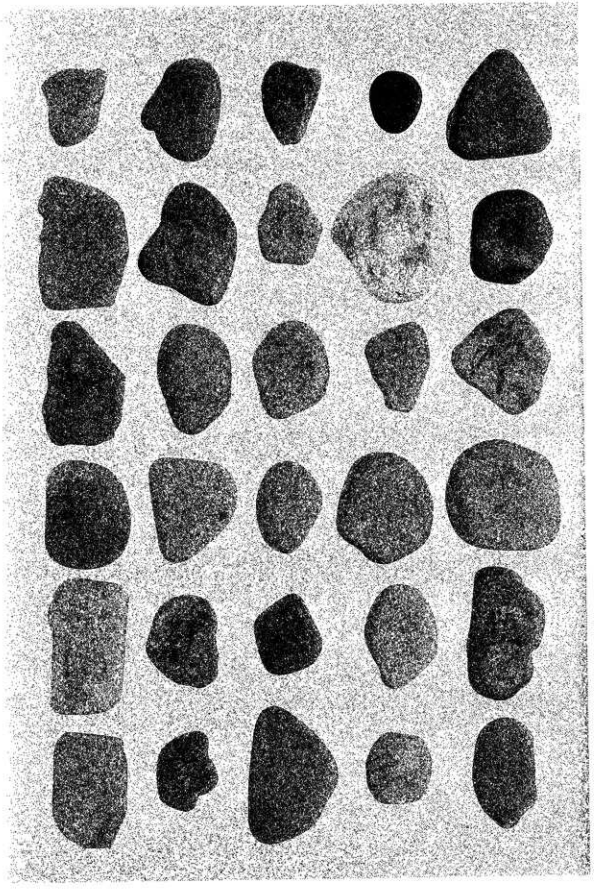
写真図版10　浄土寺遺跡出土礫石経（第７図）



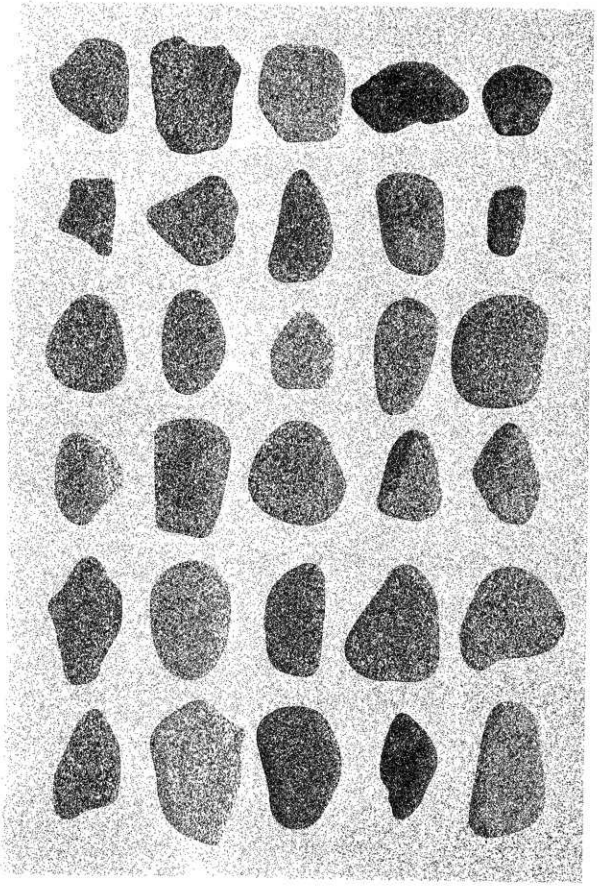
写真図版11　浄土寺遺跡出土礫石経（第8図）



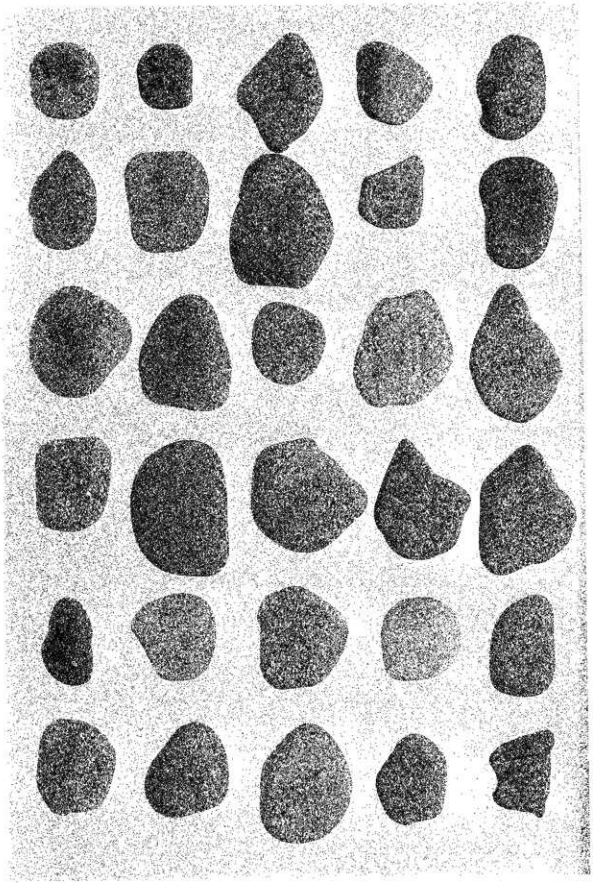
写真図版12　浄土寺遺跡出土礫石経（第９図）



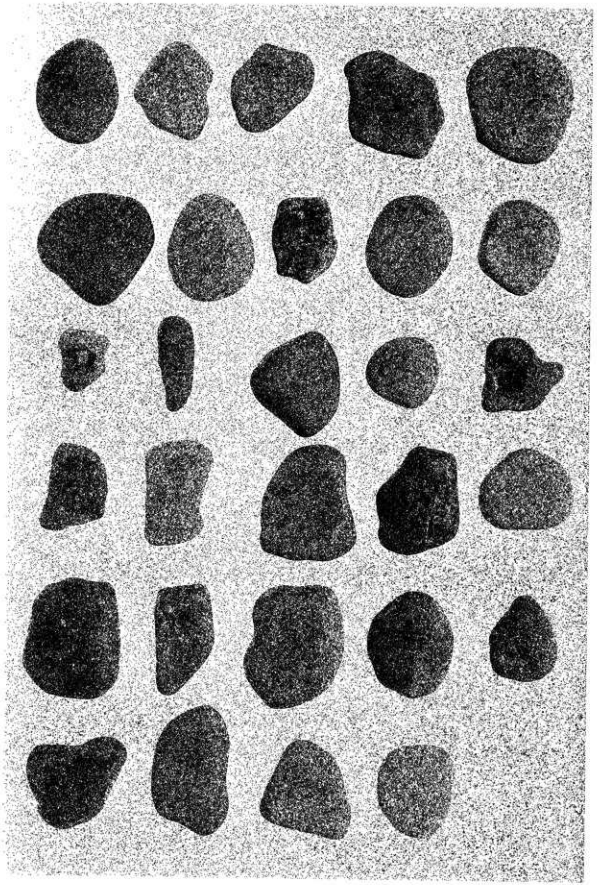
写真図版13　浄土寺遺跡出土礫石経（第10図）



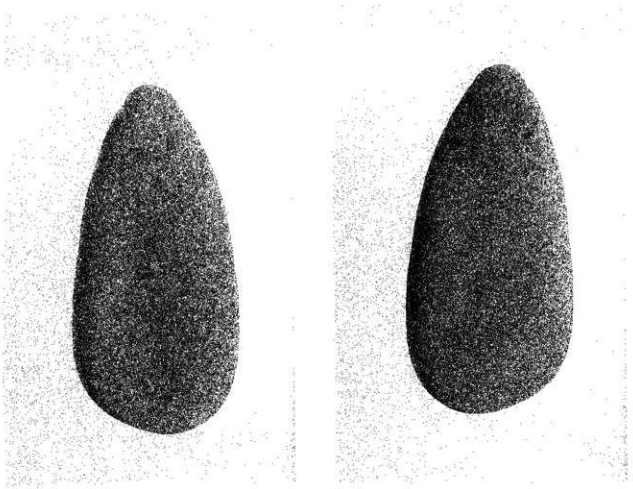
写真図版14　浄土寺遺跡出土礫石経（第11図）



写真図版15　浄土寺遺跡出土礫石経（第12図）



写真図版16　浄土寺遺跡出土礫石経（第13図）



写真図版17　浄土寺遺跡出土礫石経（第14図）

報告書抄録

書名	国道197号線東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 西王寺遺跡・毛見所遺跡・上久所遺跡・浄土寺遺跡
ふりがな	さいおうじいせき・けみどころいせき・かみくじょいせき・じょうどじいせき
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	138輯
編著者名	栗田勝弘・藤内壽竹
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021　大分県大分市府内町３丁目10番１号　TEL.097-536-1111
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西王寺遺跡	大分市大字佐野	442011	322306	33°12'28"	131°43'40"	950701～950930	2,000㎡	国道197号線東バイパス建設
毛見所遺跡	大分市大字佐野	442011	322307	33°12'31"	131°43'46"	951001～951227	2,000㎡	
上久所遺跡	大分市大字丹川	442011	322191	33°12'00"	131°42'30"	980119～980313	1,800㎡	
浄土寺遺跡	大分市大字宮河内	442011	322036	33°11'24"	131°42'10"	980218～980227	25㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西王寺遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡５基	土師器・須恵器	
毛見所遺跡	包含層	縄文晩期・古代		縄文晩期土器・古代の土師器・須恵器	晩期土器に籾圧痕付着
上久所遺跡	集落	中世	掘立柱建物６棟		
浄土寺遺跡	埋納遺構	近世	埋納土坑	一字一石経	金光明最勝王経

大分県文化財調査報告書第138輯

西王寺遺跡・毛見所遺跡
上久所遺跡・浄土寺遺跡

国道197号線東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月29日

発　行　大分県教育委員会
〒870-0021　大分市府内町３丁目10番１号
TEL (097) 536-1111
印刷所　尼花印刷有限会社
〒877-0026　大分県日田市田島本町8-8
TEL (0973) 23-0123